

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第11集

高知県香美郡香我美町

稗 地 遺 跡

HIE

J1

山南川河川改修工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1993.3

財団法人 高知県文化財団
埋蔵文化財センター

稗 地 遺 跡
HIE JI

序 文

平成3年度に実施しました、香美郡香我美町「稗地遺跡」の調査報告書を刊行する運びとなりました。

平成3年4月に埋蔵文化財の調査・研究及び普及啓蒙についての中心機関となるべく埋蔵文化財センターが開設されましたが、県民の皆様方の温かいご理解とご協力により、その運営もようやく軌道に乗ってまいりました。県民共有の文化的財産であります埋蔵文化財の保護体制を充実させることにより、県民文化の振興により一層尽力する所存でございますので今後ともご協力の程よろしくお願い申し上げます。

今回の調査は、山南川水系河川改修工事に先立ち、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが高知県南国土木事務所の委託を受け、遺跡の記録保存のため実施したものです。

本書が文化財の研究及び保護の一助としてご活用いただければ幸いに存じます。

最後に、調査に際しご協力、ご援助いただきました高知県南国土木事務所並びに高知県教育委員会、香我美町教育委員会、地元稗地地区の皆様方をはじめ、調査関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成5年3月

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

所 長 小橋 一民

例言

1. 本書は、山南川河川改修工事に伴う^{ひえし}稗地遺跡（香我美町上分字稗地に所在）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが高知県の委託を受け、平成3年10月28日～11月28日の間に実施した。整理作業は平成4年度に実施した。
3. 発掘調査体制は以下の通りである。

●調査員

松田知彦（高知県教育委員会文化振興課 社会教育主事）

出原恵三（同 主 幹）

●事務担当

山崎 浩（（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 事業課長）

三浦康寛（同 主 幹）

●調査協力

近森泰子（同 調査員）

藤方正治（同 調査員）

4. 本書の執筆・編集は松田知彦が行った。
5. 遺物整理・図面作製等の作業においては竹村延子・大原喜子・山中美代子・宮地佐枝・矢野雅氏の協力を得た。
6. 本報告書作製にあたっては、出原恵三氏（高知県教委）をはじめ（財）高知県文化財団埋蔵文化財センターの各調査員の方々から貴重な助言、教示を得た。記して深く感謝の意を表したい。
7. 発掘作業においては、地元稗地地区を中心とする下記の方々の協力を得ることができた。記して深く感謝の意を表したい。

佐野 宣重	貞岡 重通	岩河美枝子	岩河 照子	十万 睦
吉川 糸恵	長崎 三湖	水田 万喜	久家 正子	吉川 徳子
別役 美益	馬地 節子			

報告書要約

1. 遺跡名 ^{ひえじ} 稗地遺跡
2. 所在地 ^{かみ}香美郡^{かがみ}香我美町上分字稗地
3. 立地 香我美町東部山南川左岸 標高約22.5m
4. 種類 弥生・古墳時代、中世（集落跡）
5. 調査主体 （財）高知県文化財団 埋蔵文化財センター
6. 調査契機 山南川河川改修工事
7. 調査期間 平成3年10月28日～11月28日
8. 調査面積 500 m²
9. 検出遺構 [弥生時代後期～古墳時代初頭] ST6棟 SK1基
[中世] SK4基、SD2条、P3基
[時期不明] SA1列、SD1条、P多数
10. 出土遺物 弥生土器、古式土師器、土師質土器、青磁、瓦質土器、鉄鏃、鉄製穂摘具
11. 内容要約 今次調査では弥生後期～古墳時代の初頭の竪穴住居址を6棟（円形3・方形3）検出した。そのうち円形住居址と方形2棟にベッド部を有する。また一括資料としてSK3、中世の一括資料としてP7から良好な遺物が得られた。鉄製穂摘具をはじめ、鉄器資料の豊富さも特記できよう。

目 次

第Ⅰ章 調査に至る経過	1
第Ⅱ章 稗地遺跡の位置と環境	3
第Ⅲ章 調査区の概要及び調査方法	5
1 調査区の概要	5
2 調査方法	5
第Ⅳ章 検出遺構と遺物	9
1 弥生・古墳時代の遺構と遺物	9
2 中世の遺構と遺物	25
3 その他の遺構と遺物	26
第Ⅴ章 まとめ	29
1 遺構	29
2 遺物	31

図 版 目 次

第1図：稗地遺跡の位置と周辺の遺跡	2
第2図：発掘調査区位置図	4
第3図：稗地遺跡検出遺構全体図	7
第4図：ST1と出土遺物	10
第5図：ST1出土遺物	11
第6図：ST2と出土遺物	12
第7図：ST3と出土遺物	14
第8図：ST3出土遺物	15
第9図：ST3出土遺物	16
第10図：ST4と出土遺物	18
第11図：ST4出土遺物	19
第12図：ST5と出土遺物	20
第13図：ST5出土遺物	21
第14図：ST6と出土遺物	22
第15図：ST6出土遺物	23
第16図：SK1～SK5とSK1・SK3出土遺物	24
第17図：P7・SD2とP5～P7・SD2・SD3出土遺物	27
第18図：SA1と包含層出土遺物	28

写真図版目次

写真1：発掘調査区全景・発掘調査風景（ST4）	41
写真2：ST1完掘状態・ST1ベット部セクション	42
写真3：ST2検出状態・ST3検出状態	43
写真4：ST3完掘状態・ST3内SD2セクション	44
写真5：ST3遺物出土状態	45
写真6：ST4完掘状態・ST4遺物出土状態	46
写真7：ST5完掘状態・ST5遺物出土状態	47
写真8：ST5遺物出土状態	48
写真9：ST6完掘状態・ST6北壁セクション	49
写真10：SD2東壁セクション・SK1完掘状態	50
写真11：SK3遺物出土状態・P5遺物出土状態	51
写真12：P7遺物出土状態・包含層遺物出土状態	52
写真13：ST1出土遺物	53
写真14：ST3出土遺物	54
写真15：ST3出土遺物	55
写真16：ST4・5出土遺物	56
写真17：ST5・6、SK1、SD3、包含層出土遺物	57
写真18：SK3出土遺物	58
写真19：P7出土遺物	59
写真20：ST3出土石器（石包丁・砥石）	60
写真21：ST3・5出土鉄器（鉄製穂摘具・鉄鍬）	61

第Ⅰ章 調査に至る経過

香宗川中小河川改修関連工事は、農業用導水路の系統的整備によって農地の効率利用を図り又、治水も合わせ目的として計画が進められた。その一環として香宗川の支流である山南川河川改修工事が計画されたが、当該事業計画区域内には周知の埋蔵文化財包蔵地である稗地遺跡が存在し、弥生時代～古墳時代の遺物が確認されていた。すでに、稗地遺跡の周辺においては拝原遺跡や十万遺跡など当該期の遺跡が立地しており、稗地遺跡も山南川流域に展開する一連の集落遺跡となることが考えられ、当地域の歴史を明らかにするうえで重要な位置を占める可能性がある。当該工事が計画通り実施されれば地下の埋蔵文化財も甚大な影響を受ける為に、文化財保護部局である高知県教育委員会及び香我美町教育委員会は、高知県南国土木事務所と協議を行い、その結果遺跡内の工事対象区域500㎡について記録保存のための全面発掘を実施することになった。

発掘調査業務は財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが担当し、平成3年10月28日～11月28日に行われた。



稗地地区の集落と発掘調査風景



1	稗地遺跡	弥生・古墳・中世	12	棒ヶ谷遺跡	弥生	ア	八王子神社古墳	古墳
2	拝原	縄文・弥生・古墳	13	鳴呼	古墳～平安	イ	野神	〃
3	的場	弥生	14	十万	弥生～中世	ウ	棒ヶ谷	〃
4	幅山	〃	15	下分遠崎	弥生	エ	鳴呼一号墳	〃
5	中幅	弥生・古墳	16	曾我	弥生～中世	オ	池の本古墳	〃
6	下幅	〃	17	東野土居	古墳～平安	カ	大崎山	〃
7	立花	古墳	18	ハザマ	弥生～中世	キ	ノツゴ	〃
8	宮の前	弥生・古墳	19	大東	古墳～平安	ク	土居山	〃
9	宮の西	〃	20	御所の前	弥生～中世	ケ	加治ヶ山	〃
10	岡の芝	古墳～中世	21	江見	古墳	コ	螢野	〃
11	野市本村	弥生				サ	徳善天皇	〃

第1図 稗地遺跡の位置と周辺の遺跡(弥生～古墳)

第Ⅱ章 稗地遺跡の位置と環境

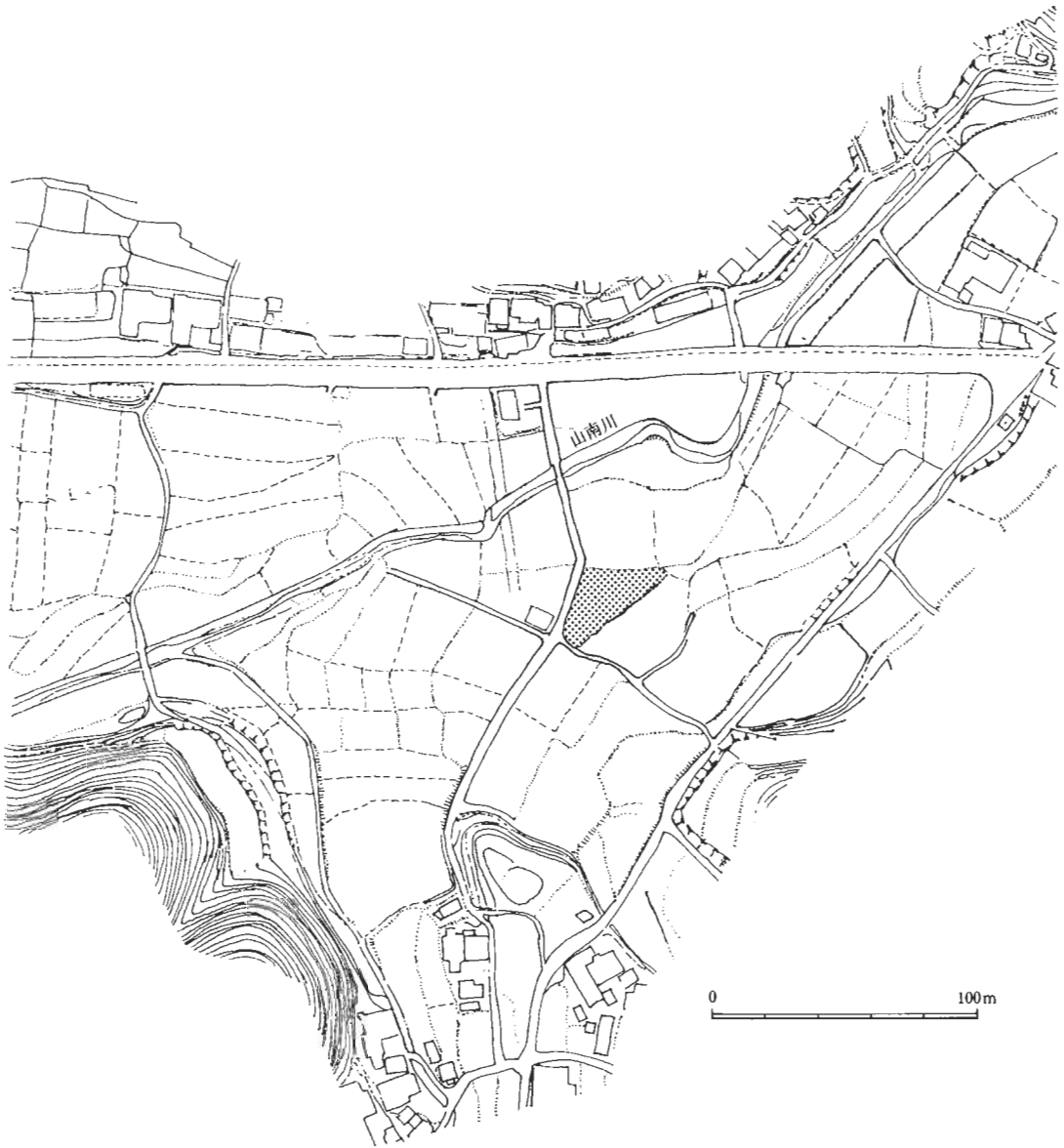
稗地遺跡は、香美郡香我美町上分字稗地に所在する。香我美町は、高知県の穀倉地帯である高知平野の東端に位置していて、北方は物部・香北・土佐山田、南方は夜須・芸西、東側は安芸、また西側は野市・赤岡の各市町村と接している。岸本の集落南側は、黒潮洗う土佐湾である。町のほぼ中央部を香宗川が南西へ向かって流れ下り、下流には氾濫原性の低地を造っている。3系統の主要山系は北東方向に向かって次第に高度を増しており、地質時代の第三紀末から第四紀にかけての地盤隆起運動に際して、北東側の山地がより大きく隆起し、南西部の土佐湾側がそれに引きずられて隆起した結果であろうとされている。(1)

遺跡所在地は、香宗川の支流である山南川左岸の氾濫原性の低地から低位段丘に続く平坦面上に位置しており、香我美町役場（北緯33度34分00秒・東経133度44分49秒）の東南東約1.7km、海岸線から北方約3.2kmの距離にあり、標高は22.5m前後である。

当遺跡周辺には、高知平野の弥生時代～古墳時代を語る数多くの遺跡が存在している。中でも最も注目されるのは、当遺跡の西方約1.5kmにある下分遠崎遺跡である。高知県中部地域には、古物部川が形成した自然堤防上に営まれた拠点的な大集落である田村遺跡群があるが、この下分遠崎遺跡も、分村によって生まれた集落である。田村遺跡群は、弥生時代の初期の段階から稲作文化を受容し、高知県中部弥生社会の中で終始その中心となった集落として知られているが、木製品が出土しなかった。この下分遠崎遺跡がその不足・不十分な遺物を補う形となった。木製品が出土したのは弥生中期の遺構検出面で、多量の自然木とともに、農耕具・工具・祭器などの完形品のほかに、加工痕をもった板状・柄状・棒状の木製品が出土した。田村遺跡群から分村し、定着した集落についての重要な資料を含んだ遺跡である。(2)

十万遺跡からは縄文時代晩期の貯蔵穴に伴って黒色磨研の浅鉢が出土しており、その他弥生前期・中期前葉の遺物も散見される。弥生中期後半になると丘陵上に的場遺跡や棒ヶ谷遺跡が営まれるが、具体的な状況は不明な点が多い。弥生時代後期になると、香宗川や山北川沿の河谷平野に多くの小規模な集落が出現し、丘陵斜面からは壺棺墓が発見されている。古墳時代になると、中期には徳善天皇古墳が築かれ、続く後期には周辺一帯で横穴式石室を持つ古墳が数基確認されている。7世紀になると徳王子古窯跡群で瓦・須恵器が焼かれるようになり、このような地域的发展を背景として奈良・平安時代に至ると、十万遺跡や曾我遺跡のように豪族館や郡衙級の建物群が出現するようになる。(3)

稗地遺跡は、このような地域的发展の中で、弥生時代後期～古墳時代前期の小集落がいかに営まれたかという問題を提示してくれる遺跡として位置づけることができよう。



第2図 発掘調査区位置図

第Ⅲ章 調査区の概要及び調査方法

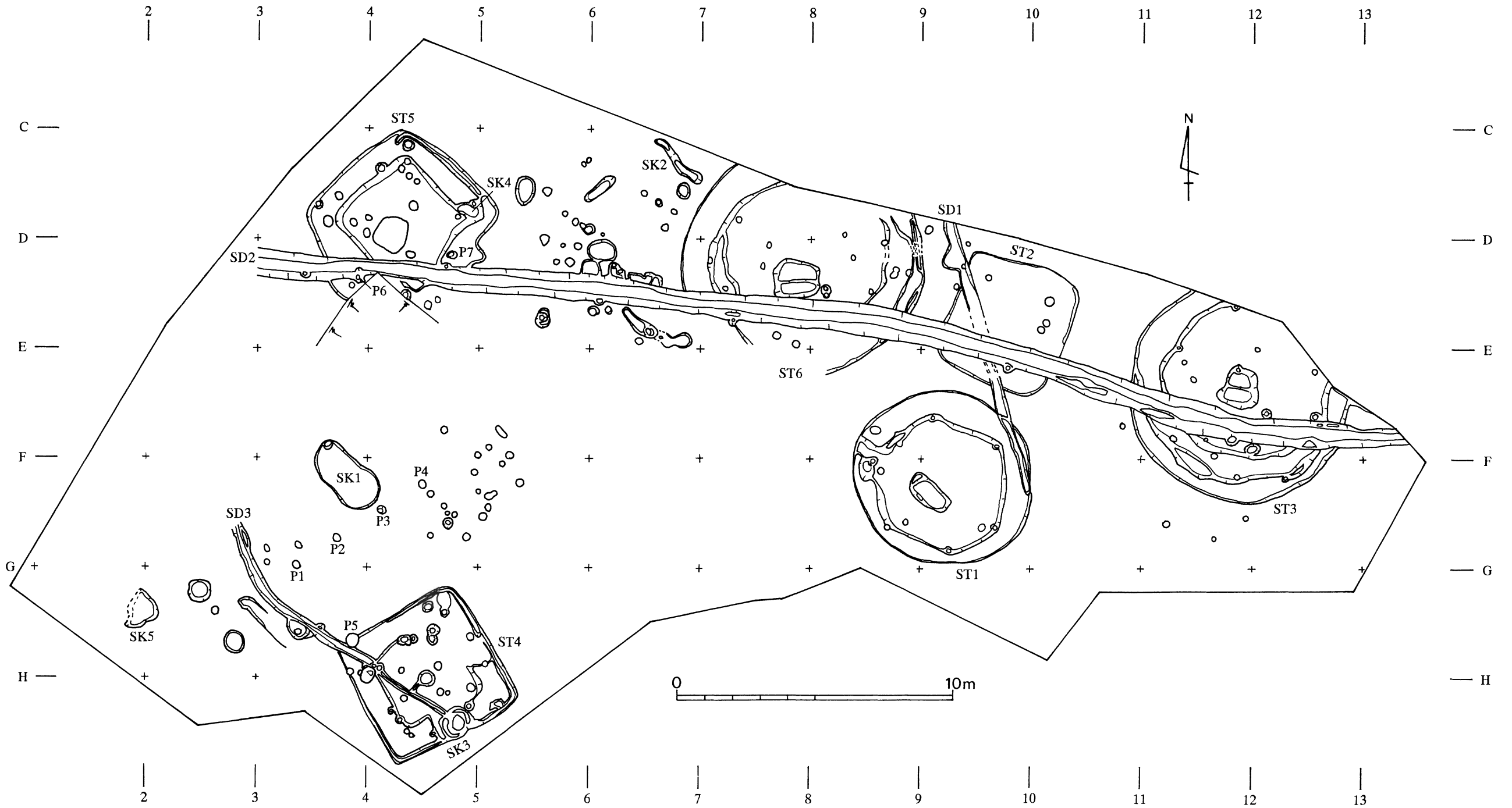
1 調査区の概要

調査の対象となった面積は約500m²で、東西方向に長軸をもつ台形状の調査区である。調査区北側はすでに河川改修工事のため断面が垂直に切られており、西側は幅員2～3mの農道である。他方向は水田、畑地と接している。調査区全面はほぼ平坦であり、調査区内の比高差は少ない。また、調査区は水田、畑地として利用されてきており、ハウス栽培に使われていた部分もある。なお調査区西側の一部は耕作あるいは建造物によってかなり深くまで攪乱を受けており、遺構・遺物の検出ができなかった。

2 調査方法

まず調査区東側について厚さ10～20cmの耕作土を重機で削ぎ取った後、人力で精査したところ、耕作土直下より遺構を認めることができた。この段階で遺構が調査区全面に広がっていると判断し、全面発掘調査を実施することにした。

遺構の実測及び遺物取り上げについては、磁北にあわせて任意に4m毎に測量杭を設け、東西方向に数字、南北方向にアルファベットを打ってグリッド番号とした。



第3図 稗地遺跡検出遺構全体図

第Ⅳ章 検出遺構と遺物

1 弥生・古墳時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居

ST1 (第4・5図)

調査区の中央やや東よりに位置し、ほぼ円形の平面プランを持つ住居址である。直径6.5m、床面までの深さは20cm前後である。東北の隅をSD1により南北方向に切られている。壁面にそって幅0.3～1.1m、高さ5～15cmのベッド状遺構が伴っている。ベッドは六角形を呈し、北西方向でとぎれている。埋土は濃茶色粘質土単純一層で、Ⅱ・Ⅲ層がベッド部となっている。ベッドは、基底に地山部分を残し、その後版築構法により拡張するという技法でつくられている。住居に伴う柱穴はP1～P3・P7・P8が考えられ五角形を呈する。P1～P2間は2.5m、P2～P3は3mである。各ピットの規模は表-1に示した。中央ピットは住居址の中心より南側に寄っており、168×92cmの楕円状をなし、深さは20cmである。部分的に段状をなしており断面は舟底状を呈す。底部には炭化物が堆積している。また、中央ピット脇には焼土が薄く堆積している。

遺物は、住居址の規模の割には多くない。器種別には壺と鉢が多く甕が少ない。1～6はラッパ状に強く外反する壺の口縁部である。1の口唇部は上に摘み上げ、内外面共にナデている。4～6は口唇部に装飾を施している。4は貝殻腹縁による押引文、5は貝殻腹縁による圧痕文、6はハケ状工具による波状文を巡らし、条線は3条である。

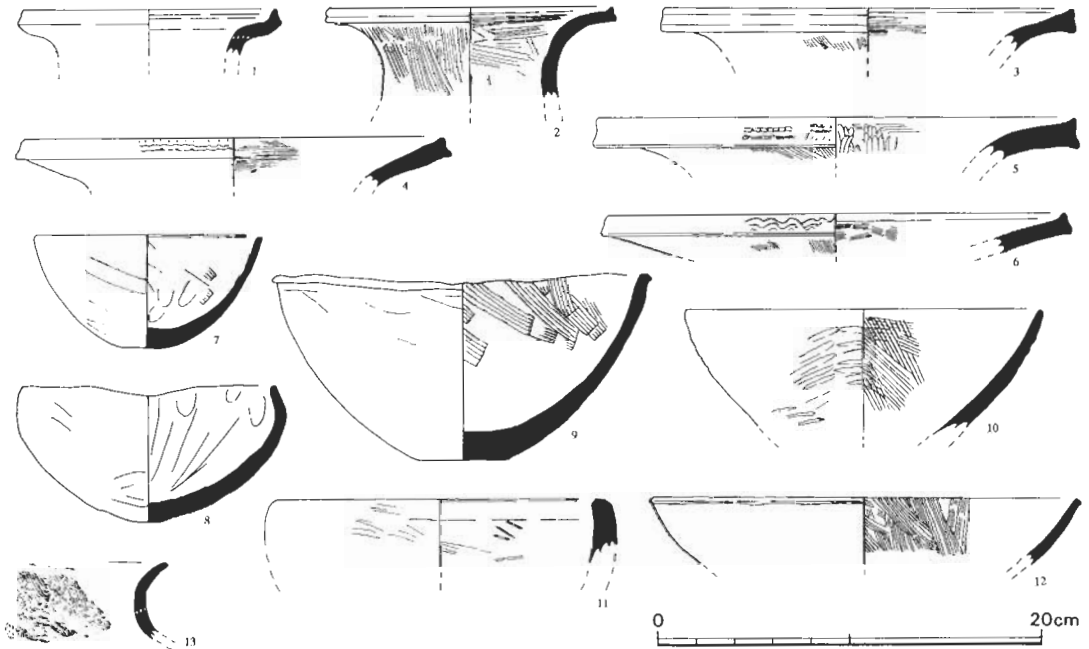
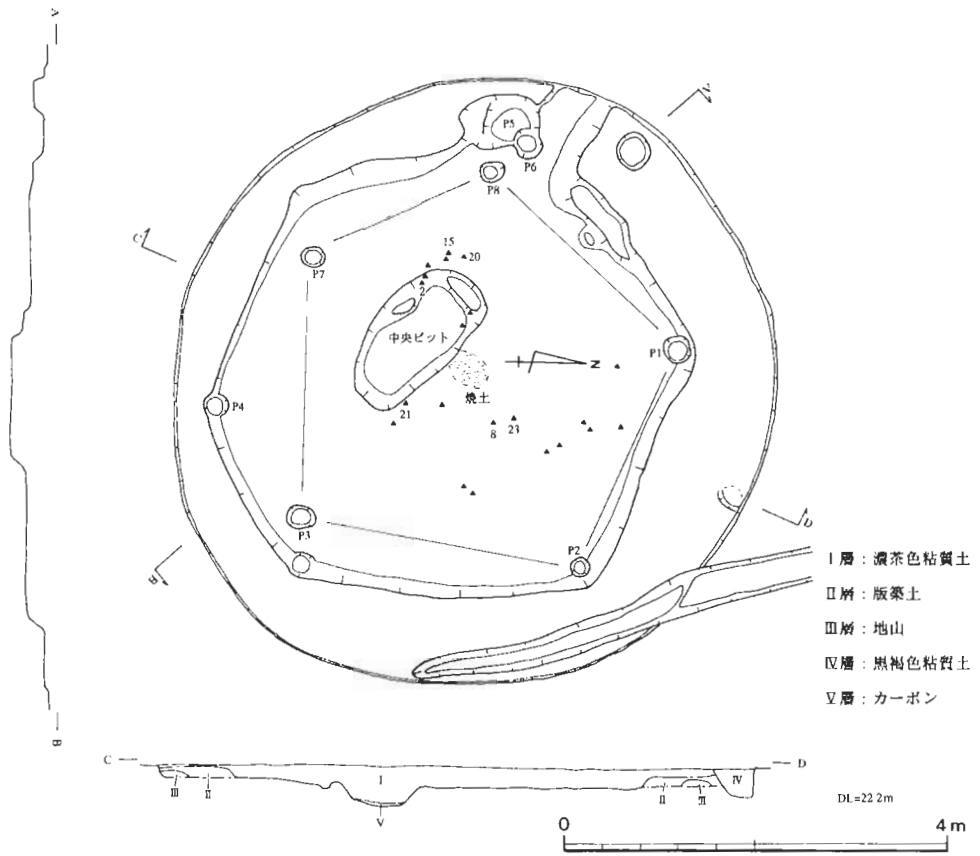
甕は確認できるものが一点のみである。13は口縁部が外反し、内外面共ハケ調整を施す。

鉢は6点出土している。外面はナデ調整をもつものが多い。7・8は丸底の小型の鉢である。9は平底の中型の鉢。10～12は中型の浅い鉢と思われる。

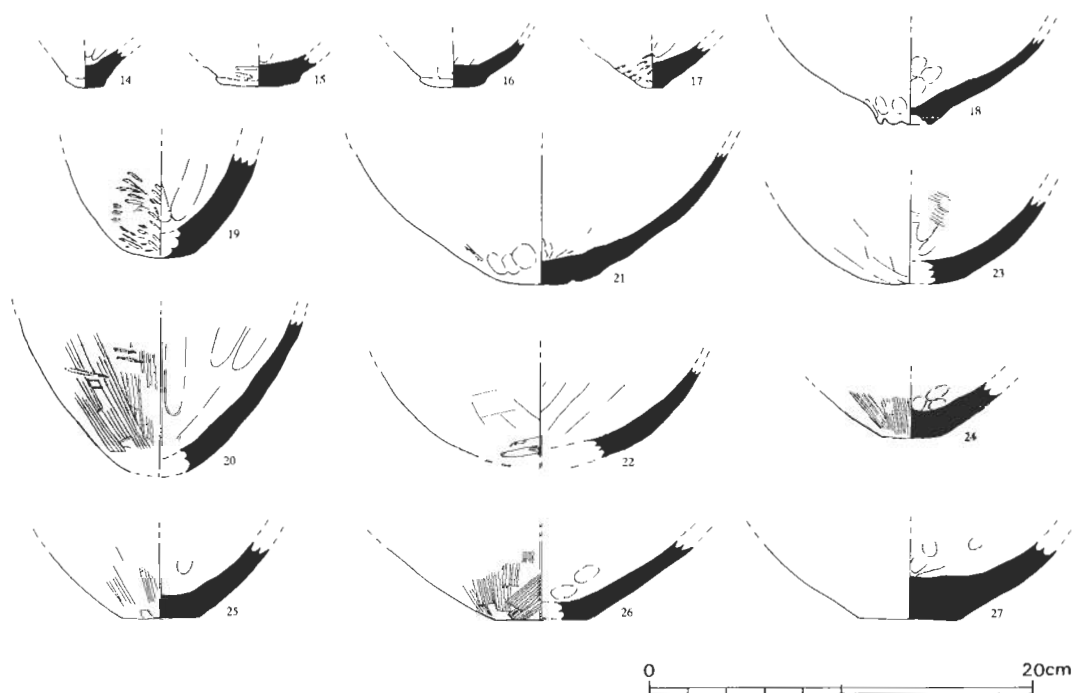
これらの他壺・甕の底部が14点出土している。底部の形態は、突出した平底(14～16・18)4点、平底(17・19・24～27)6点、丸底(20～23)4点である。ST1は弥生時代後期に属する。

第1表 ST1 柱穴規模

ピット No.	長軸×短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	28×24	48
2	径 20	38
3	径 22	38
4	径 22	31
5	40×32	28
6	30×28	41
7	24×20	18
8	26×21	15
中央ピット	168×92	20



第4図 ST1と出土遺物



第5図 ST1と出土遺物

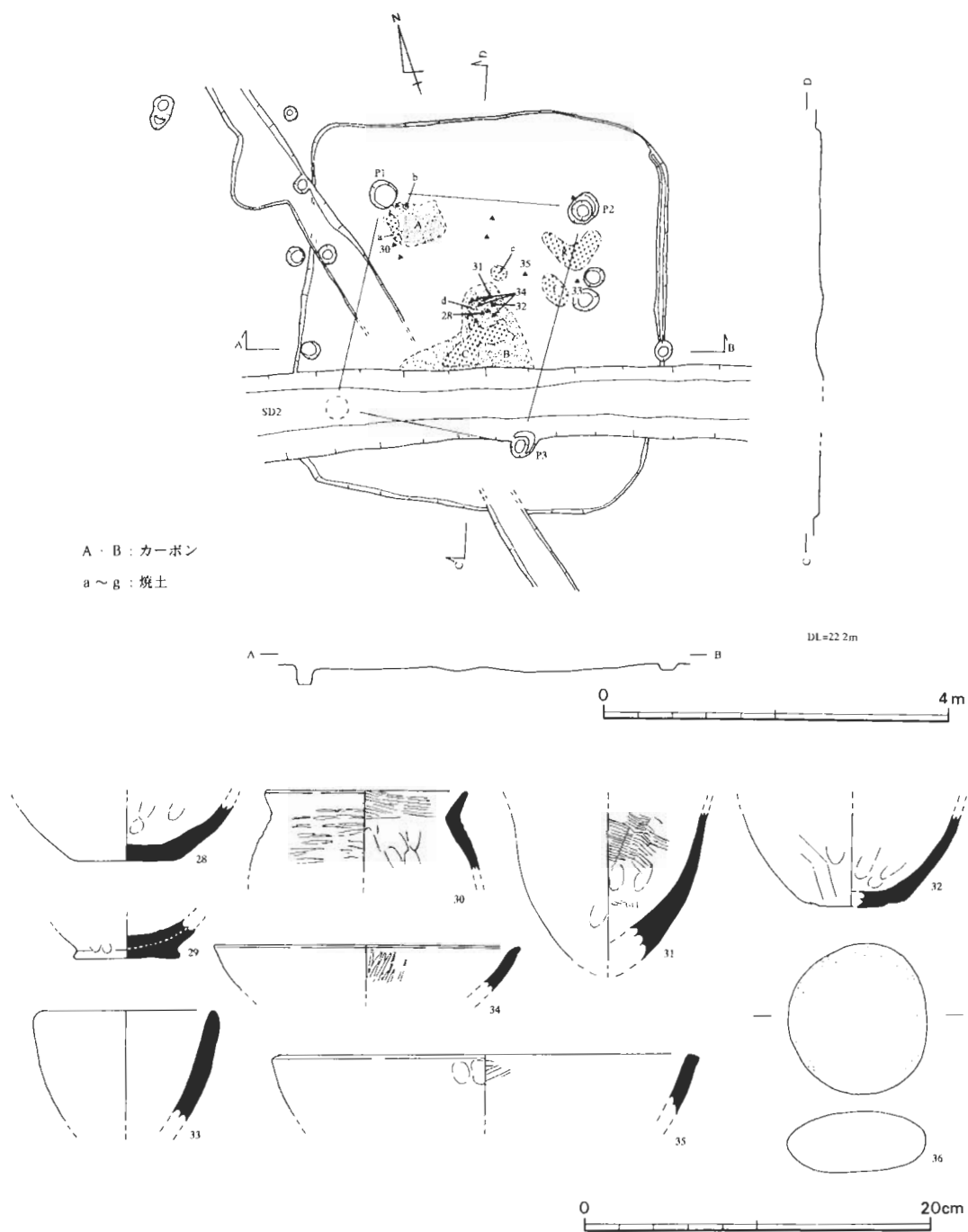
ST2 (第6図)

ST1の北側に位置し、一辺4.5m前後の方形の竪穴住居である。東の2つのコーナーは隅丸方形をなし、北西側のコーナーはやや角張っている。南西はSD2に切られており形態不明である。また北西から南東方向にかけてはSD1により切られている。壁の立ち上がりは5～10cmであり非常に浅い。床面中央部に5cmの比高差をもつマウンドがあり、それに続いて中央ピットと考えられる凹みが存在するが、形態ははっきりしない。中央マウンド部及び凹み部には広範囲にわたりカーボンと焼土が残存し、周辺部にも広がる。位置は第6図、規模は表-2に示した。支柱穴はP1～P3を想定することができる。4本柱で本来はSD2に切られている位置に柱穴が存在したものと考えられる。柱穴間距離はP1-P2が2.3m、P2-P3が2.8mである。各々の規模はP1が31×30cm、深さ22cm、P2は段掘りになっており39×29cm、深さ51cm、P3は24×20cm、深さ24cmである。

出土遺物は図示できるものが少ない。28・29は壺底部である。28は平底から内湾気味に立ちあ

第2表 ST2 カーボン及び焼土規模

種別	長軸×短軸 (cm)
カーボン A	60×54
〃 B	158×100
焼土 a	35×18
〃 b	8×7
〃 c	85×55
〃 d	15×9
〃 e	19×18
〃 f	41×26
〃 g	60×57



A・B：カーボン
a～g：焼土

第6図 ST2と出土遺物

がり、内面にヘラ磨きが見られる。29の底部は断面台形状を呈し外面に指頭圧痕、内面にナデ調整を施す。30～32は甕である。30は口縁部が「く」の字状に外反し、内面に稜をなす。外面は横方向の叩き調整を施す。31は胴部外面ナデ調整、内面ハケ調整を施し、指頭圧痕が顕著に見られる。32は平底の底部を持つ。33～35は鉢である。33は内外面共にナデ調整を施す。34は内面がヘラ磨きされた浅い鉢である。36は磨石である。ST2の時期決定は難しいが、住居址のプラン、出土土器から一応古墳時代初頭と判断した。

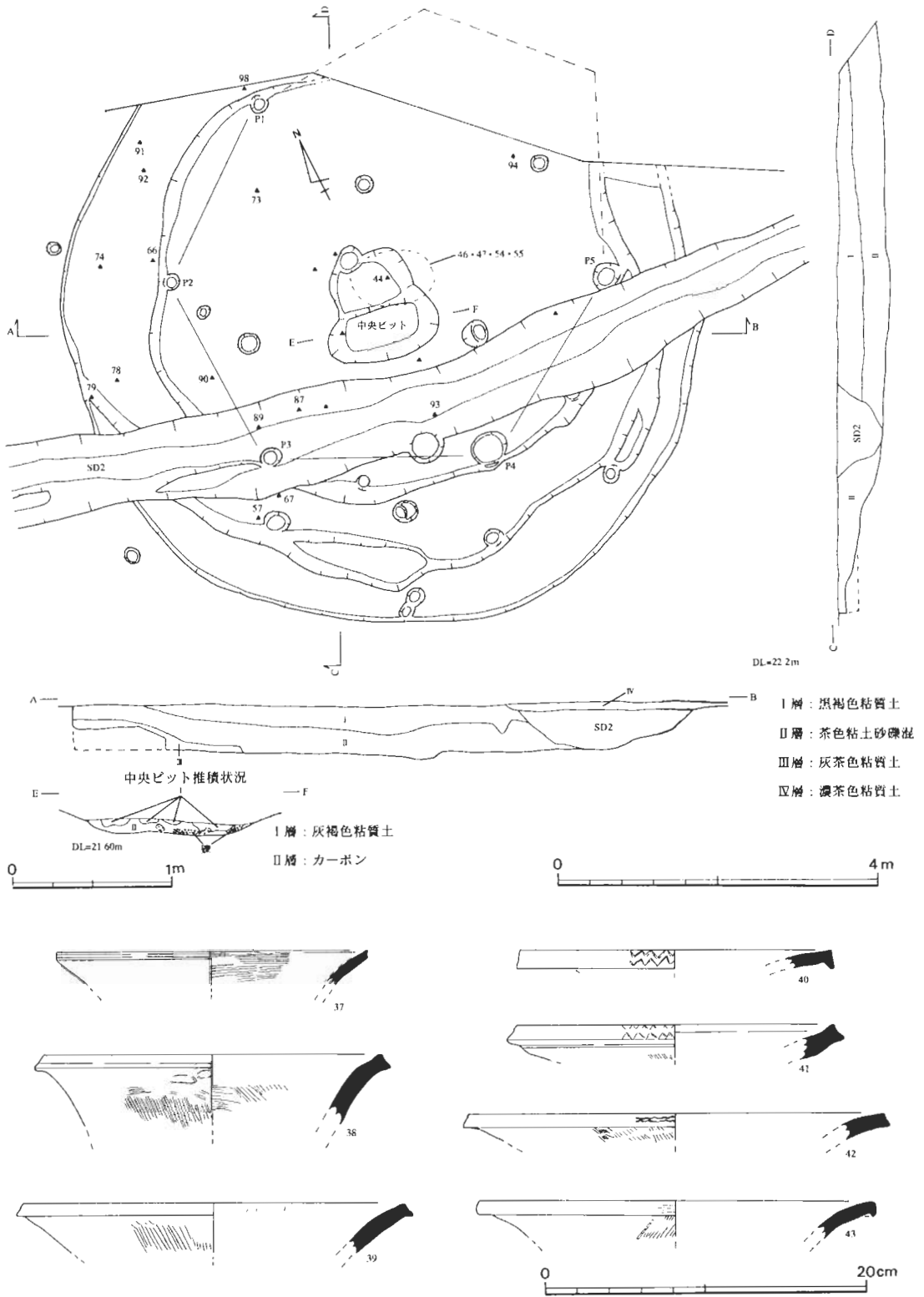
ST3 (第7～9図)

調査区の東端に位置し、北側約1/4が調査区外に出ているが、約8mの径をもつ大型の円形住居址であり、床面からの深さは約60cmである。中央部やや南寄を東西方向にSD2により切られている。壁面にそって幅1～1.8m、高さ30～40cmのベッド状遺構が伴っており南側約1/3は段状になっている。ベッド部構築の技法はST1と異なっている。ST1は地山を基底部とし、その上を版築により拡大しているのに対し、ST3は地山の削り出しのみでベッド部を構成している。埋土はI～IV層であるが、SD2より南側では後世の削平のためかI層が消滅している。またIV層は不明である。支柱穴はP1～P5の他調査区外に1～2個考えられ、六角形か七角形を呈することになろう。P1～P2・P2～P3及びP4～P5は2.5m、P3～P4は2.8mである。柱穴の規模は表-3に示した。中央ピットは南北方向に主軸をもつ瓢箪形を呈し、住居のほぼ中央部に位置する。断面は舟底型で、底部にカーボン及び小礫が推積している。また北縁部に径30cm前後、中央ピット底面からの深さ約7cmの浅いピットが付属する。

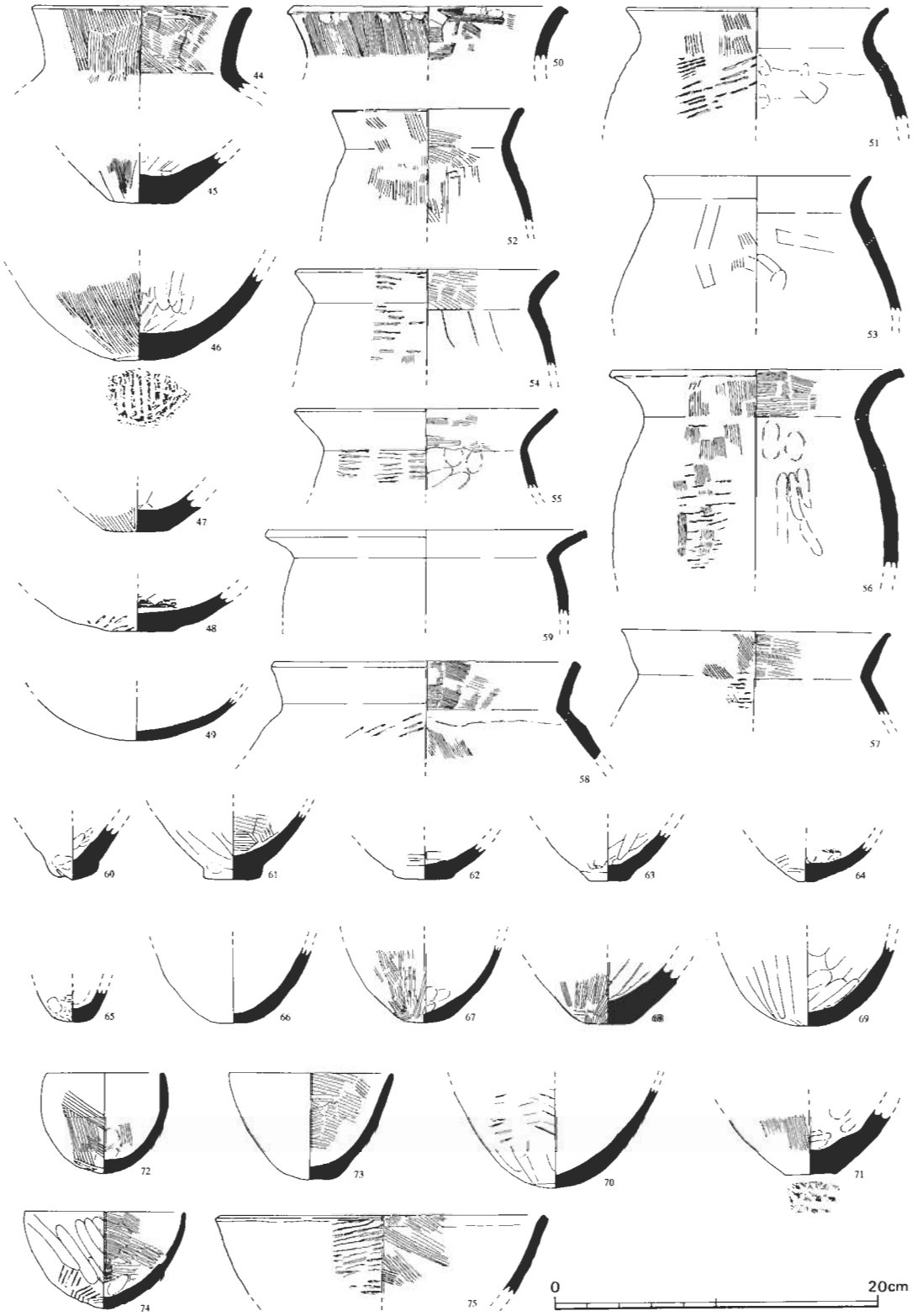
遺物は総数約3,000点が出土している。器種別では甕41%、壺27%、鉢17%、高杯15%の比率となっており、甕に河内からの搬入品が一点含まれる。壺には2つのタイプがある。(a) 口縁部が漏斗状に強く外反するもの。(39～43) (b) 口縁部がゆるやかに外反しながら立ち上がるもの。(38・44) 40は口唇部を拡張し波状文を施す。条線は2条が確認できる。44は外面に縦方向の丁寧なハケ調整を施す。内面は右下りのハケ調整。46は底部を叩いている。49は球状の胴部を持つ壺の底部と考えられる。

第3表 ST3 柱穴規模

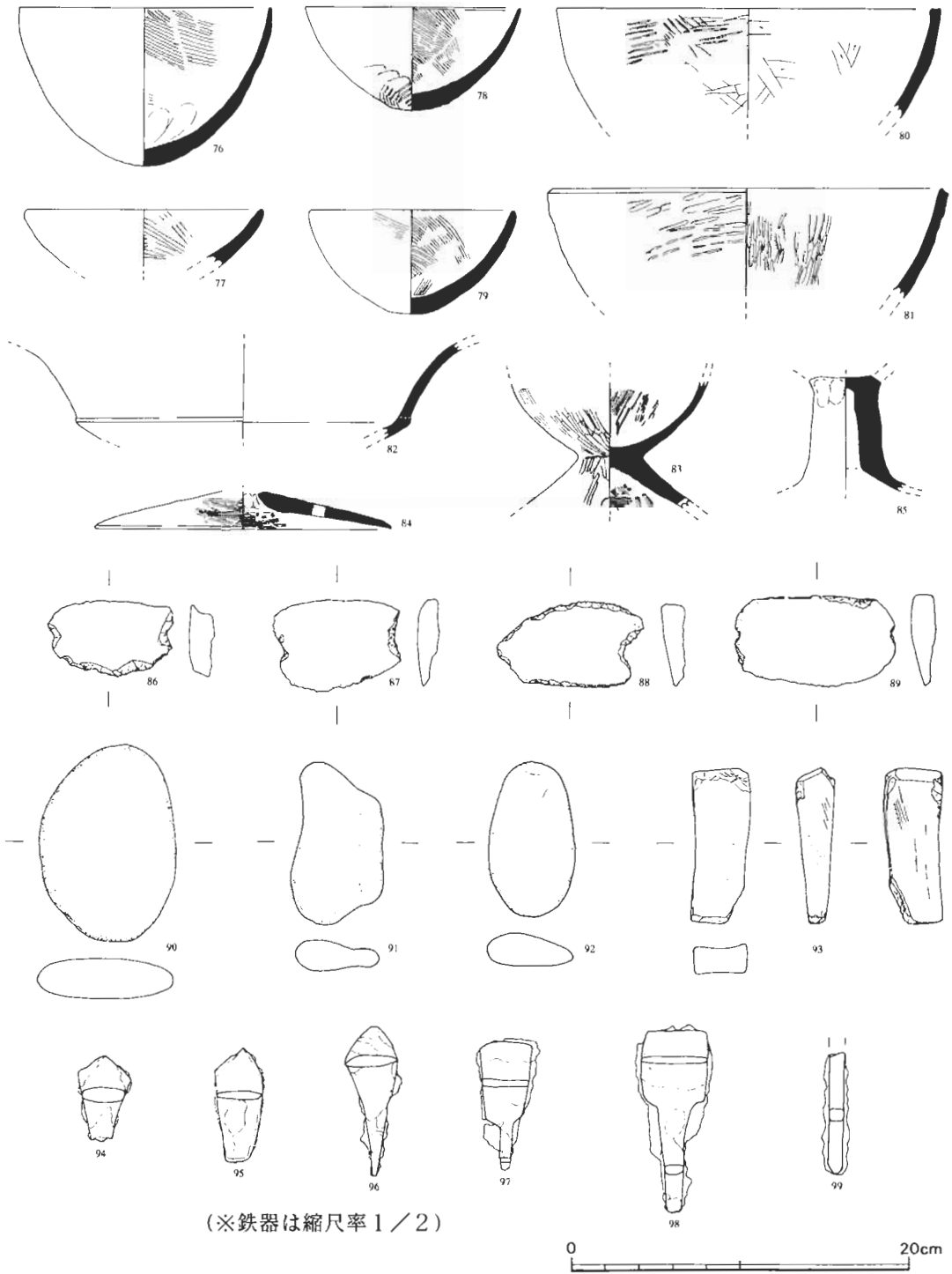
ピット No.	長軸×短軸 (cm)	深さ (cm)
P1	径 22	34
2	径 20	42
3	28×24	44
4	46×40	49
5	34×30	41
中央ピット	136×104	24



第7図 ST3と出土遺物



第 8 図 S T 3 と出土遺物



第9図 ST3出土遺物

37・50～59は甕である。37の口縁部は僅かにラッパ状に外反し、口縁端部は上方へ摘み上げている。外面はナデ調整、内面はハケ調整を施す。胎土中に角閃石及び雲母片を含み濃褐色に発色する河内平野からの搬入品である。在地系の甕はすべて口縁部が「く」の字状に外反し、(a)口縁屈曲部内面に稜を有するもの。(57・59) (b)屈曲部内面が丸味を帯びて外反するもの。(51～56・58)があるが、後者が多い。外面は叩き調整のみのものと叩き調整後ハケ調整を施すものが半々の比率で見られる。内面はハケあるいはナデている。60～64・66～71は底部であるが、形態は(a)突出した平底。(60～64) (b)平底。(66～68・71) (c)丸底。(69・70)と様々である。71は底部外面を叩いている。65は小型の手捏ね土器で内面に指頭圧痕が顕著である。72～81は鉢である。鉢は(a)半球形の椀状を呈するもの。(72・74・76・78・79)が多く、(b)コップ状のもの。(73) (c)浅い皿状のもの。(77)がある。底部は丸底のものが圧倒的に多い。体部はハケ及びナデ調整を施すものと一部叩き調整を残すものがある。(74・75・78・80・81) 81は内面を細くヘラ磨きしている。

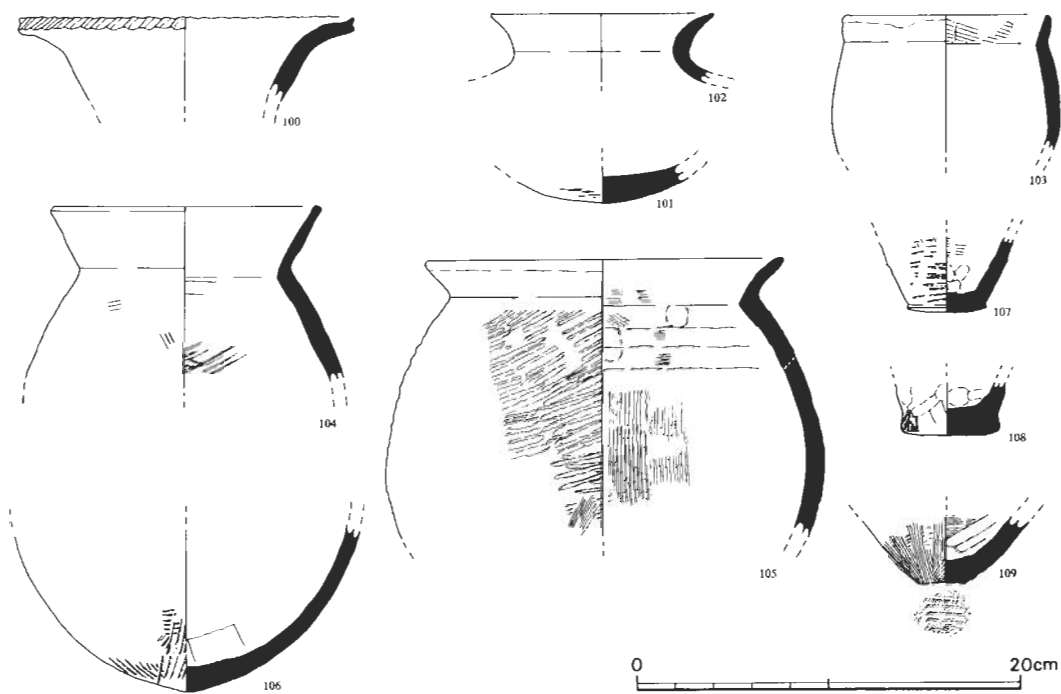
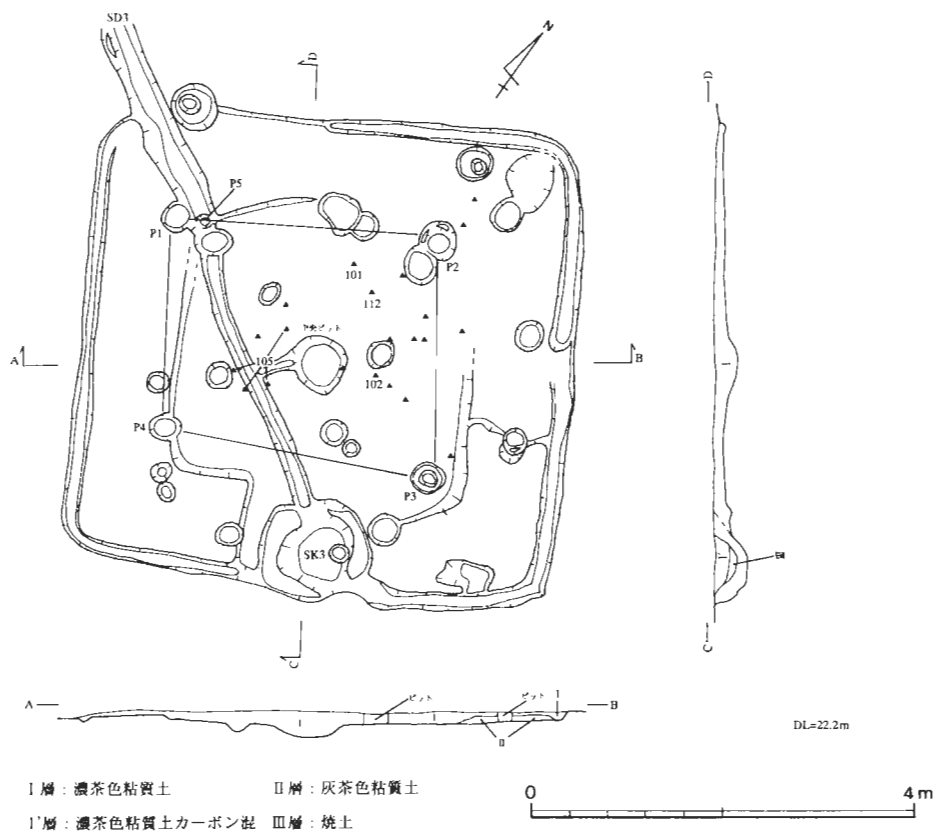
高杯は完形品には恵まれていない。82は内外面共丁寧なナデ調整を施した杯部である。83の杯部は半球形状を呈する。杯部は全面ヘラ磨きを施す。84は大きく裾が広がり、4孔を穿つと思われる。胎土中に微量ながら雲母片を含み、搬入品の可能性がある。85は磨耗が激しいが高杯脚部である。杯部との接合部には指頭圧痕を認める。

石器は8点出土した。86～89は打製の石庖丁である。孔はなく、かわりに88を除き両端に切りこみがある。90～92は磨石である。93は砥石で、断面長方形を呈し、長辺側の中央部は二面共凹む。

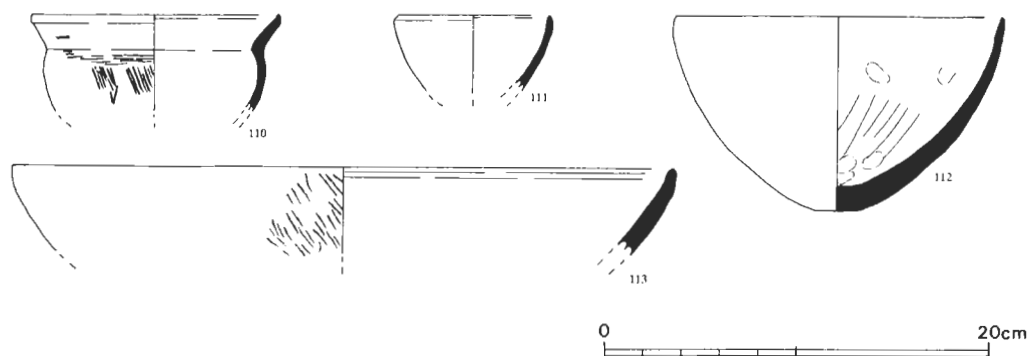
94～98は鉄鏃で、鏃身部の形態は圭頭形(94～96)、方頭形(97・98)である。99は方形の断面をもつ鉄鏃茎部であると見られる。ST3は弥生時代後期に属する。

ST4 (第10・11図)

一辺5mの方形住居址で、床面までの深さは10cmと浅い。北西の隅から南東方向へSD3に切れまた南東壁際をSK3によって切られている。ST4もベッド状遺構をもつ。ベッド部は壁に沿って南西壁―北東壁を巡るが、北西側では消滅している。「コ」の字状の平面プランを有するタイプと考えられる。ベッド部の高さは5～8cm、幅は80cm前後である。埋土はI層で、II層が東側ベッド部分を構成している。西側ベッド部は地山を削り出して作っており、東西で技法が異なる。また北西側の一部を除き、壁に沿って内側に幅10～20cm、深さ10cm内外の壁溝を巡らしている。主柱穴は規模と深さからP1～P4が想定される。各々の規模はP1(30×28cm深さ50cm)、P2(40×37cm深さ46cm)、P3(32×31cm深さ41cm)、P4(32×30cm深さ46cm)である。柱間距離はP1-P2(2.7m)、P2-P3(2.5m)、P3-P4(2.8m)、P4-P1(2.2m)である。なお、P3には径20cmの柱痕跡を認めることができる。中央ピットは住居のほぼ中央にあり、不整形円形を呈する。規模は62×61cm、床面からの深さ14cmで舟底型の断面を持つ。



第10図 ST4と出土遺物



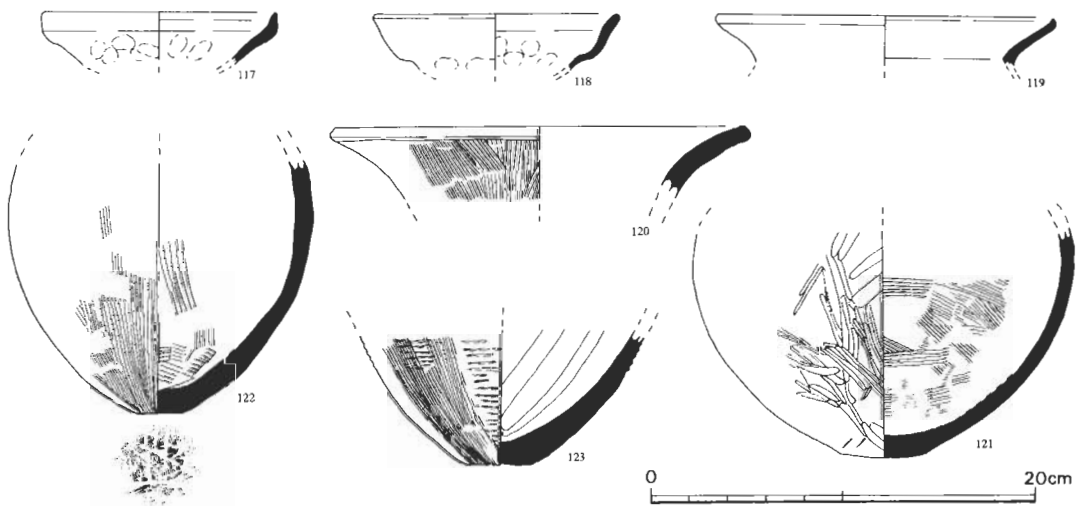
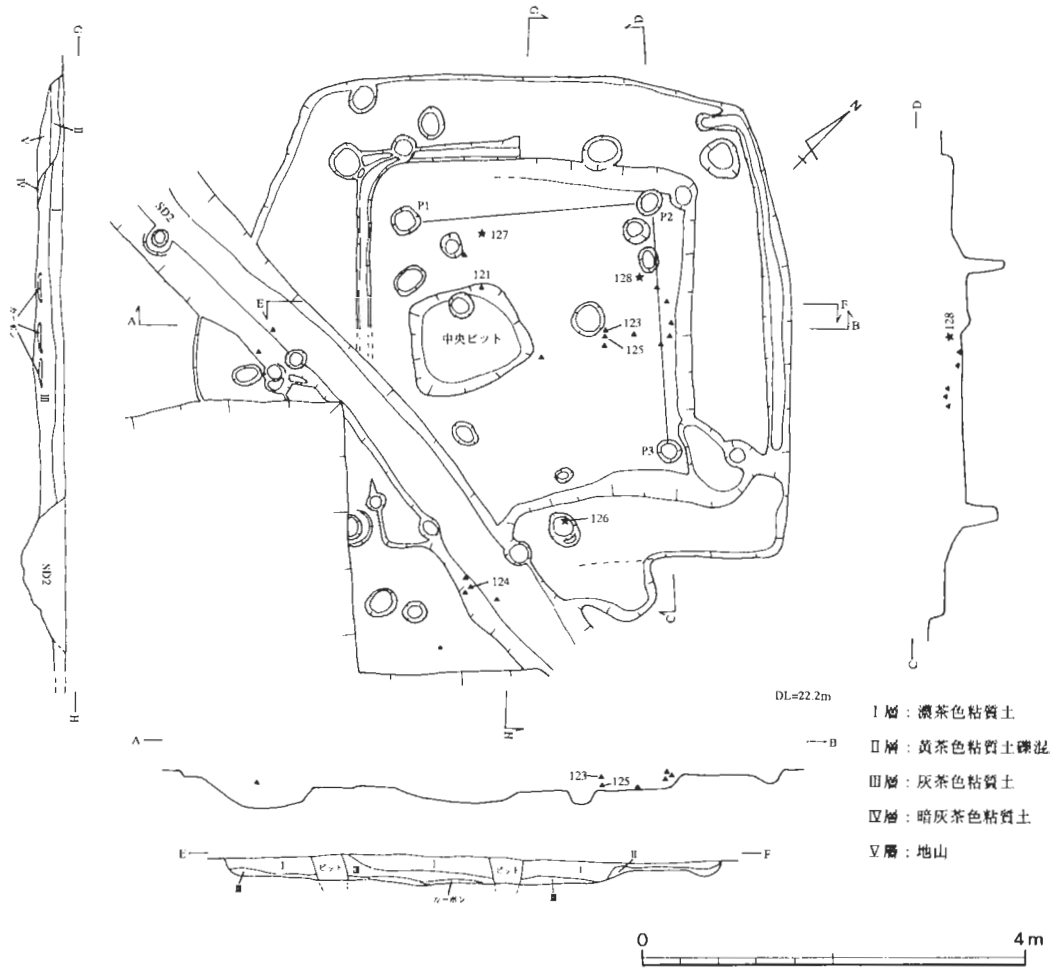
第11図 ST4出土遺物

遺物は、細片も含め総数約450点出土しているが図示できるものは少ない。100は壺の口縁部である。ラッパ状に外反し、口縁端部を上へ摘み上げている。口唇部に幅4～5mmで左下りの凹線を周囲にめぐらしている。101は壺の底部である。102～105は甕である。甕はすべて口縁部が「く」の字状に外反する。102・103は屈曲部が丸みを帯びている。104・105は内面稜をなす。外面は叩き調整後ナデで消しているもの（103・104）、太い叩き調整痕をそのまま残すもの（105）がある。105は胴部上半に粘土帯接合痕跡が認められる。106～109の底部は106を除き平底で、109は底部外面を叩いている。110はいわゆる小型丸底壺である。P5より出土した。球形の胴部から口縁部がゆるく外反し、内面に稜を持つ。頸部外面は横方向、胴部外面は右下りのヘラ磨きを施す。内面は強い横ナデ調整を施す。P5はST4に伴うピットではない可能性がある。111・112は半球形の椀状を呈す鉢である。113は浅い皿状の大型の鉢になると考えられる。ST4の所属時期はその形態から古墳時代に入る可能性もあるが、出土土器の観察から一応弥生時代後期と判断した。

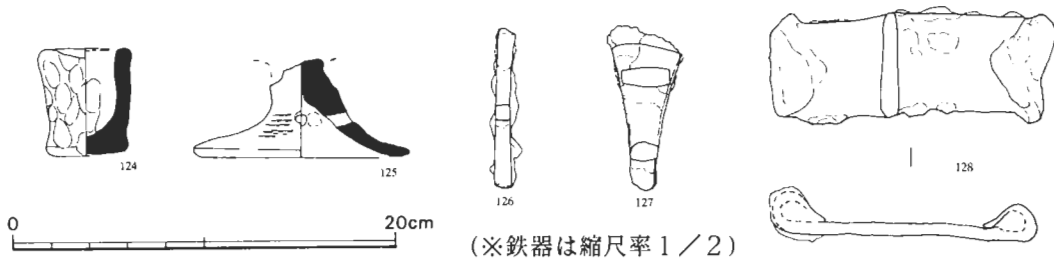
ST5（第12・13図）

調査区西端に位置し、1辺4.5m前後の方形住居址で床面からの立ち上がりは約30cmである。西側のコーナーは鈍角をなす。南東辺は後世の攪乱により確認できない。南側1/3をSD2により切られており、またSD2より南側は攪乱のため観察できない。ST5もベッド状遺構を伴っている。壁に沿って高さ20cm前後、幅0.9～1.0mの規模を持ち、ST1と同様に地山を削り出した上に版築で拡張するという技法を持っている。埋土はⅠ～Ⅳ層でⅡ層がベッド部となっている。北東側ではベッド部を構成するⅡ層の下に壁溝が存在することから2時期を想定しなければならないのかも知れない。床面には多数のピットが存在するが、支柱穴はP1～P3と考えられ、各々の柱間距離は2.6mである。他のピットの性格を明らかにすることはできない。中央ピットは住居の中央よりやや南側に位置し、台形状の平面プランを有する。長軸×短軸は117×108cm、床面からの深さ17cmで、西側の壁際に径24cmのピットを伴う。断面は舟底型である。

遺物はⅠ層を中心として細片が数多く出土しているが、図示できるものは僅かである。120は口縁部がラッパ状に外反する壺である。外面に丁寧な右下りのハケ調整を施す。121は球形の胴



第12図 ST 5と出土遺物



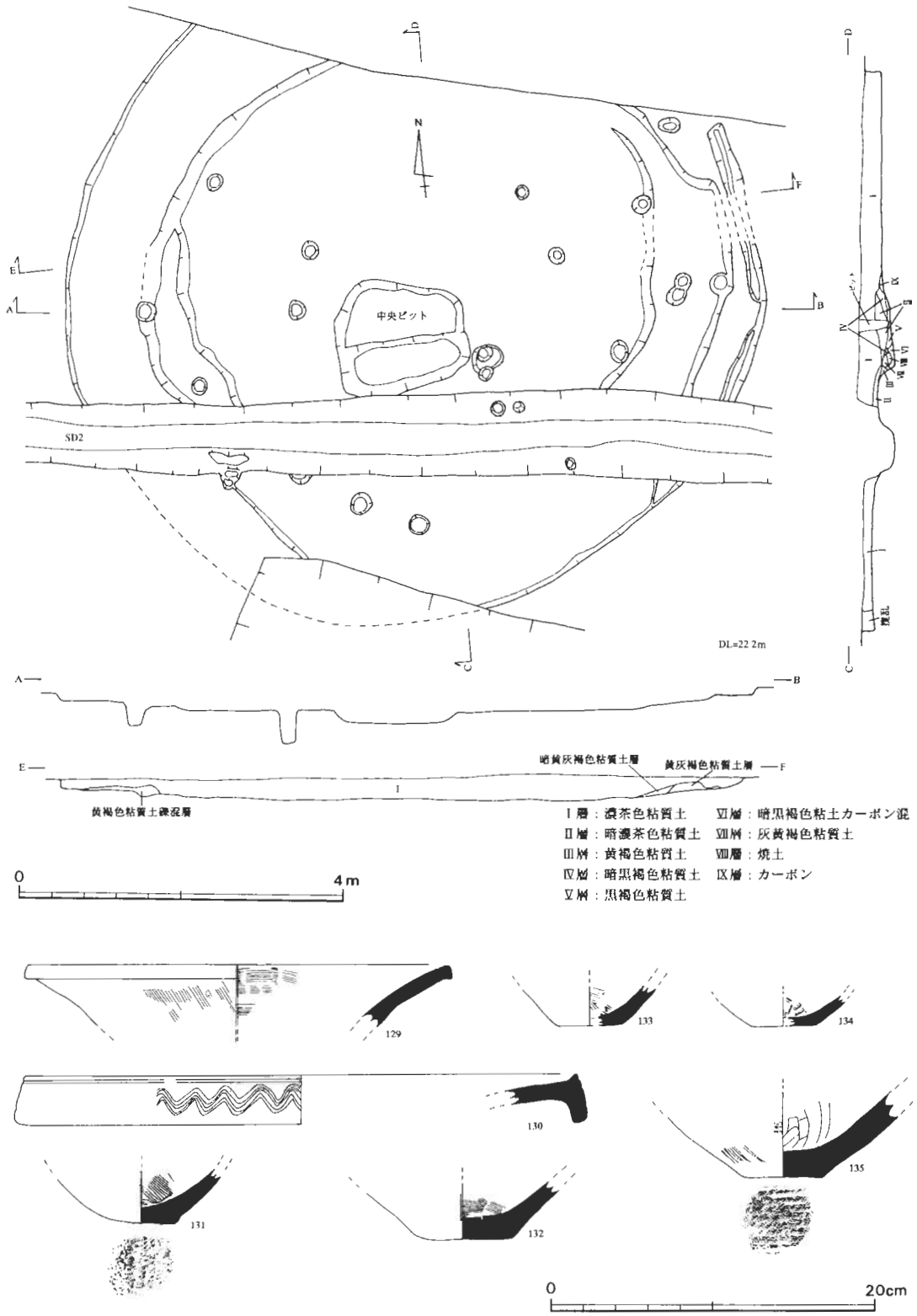
第13図 ST5出土遺物

部を持つ壺であり外面はヘラ磨きされている。119は搬入品の甕である。口縁端部を上に取り口唇部は丸くおさめている。頸部内面に鋭い稜をなし、全体丁寧なナデ調整を施す。河内平野の土器であり、Ⅱ層から出土した。122・123は甕の底部で、122は底部外面を叩いている。117・118は半球形の体部に二重口縁がつく鉢で指頭圧痕が顕著である。124は杯形の手捏土器で、胴部下端を指で絞っている。125は高杯の脚であり、4孔を外面から穿つ。ST5からは鉄器が3点出土している。126は断面方形の鎌茎であろう。127は鎌身であるが先端を欠いている。ST3出土の鉄鎌に同タイプのもが含まれる。128は鉄製穂摘具である。長さ7.4cm、幅2.7cm、厚さ3～4mmあり、両端を丸く折り返したもので完全な形を保っている。ST5の時期は出土土器から弥生後期末～古墳初頭の中で考えなければならない。

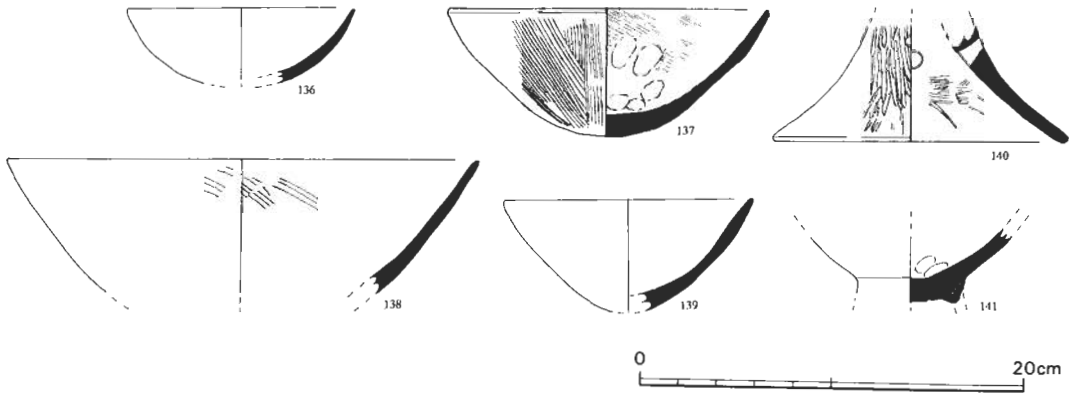
ST6 (第14・15図)

北側約1/4が調査区外に出ており、南半はSD2により東西に切られ、南端は現代の攪乱を受けているが、直径8.5m前後のほぼ円形を呈する大型の住居址である。床から検出面までの深さは10～26cmで、SD2より南側で浅い。ST6も壁面に沿ってベッド状遺構を持つ。幅1.0～1.2m、高さ15cm前後であるが、SD2より南側、及び東壁の一部では確認できない。中央ピット部を除き埋土はⅠ層で、EFラインのⅡ層目がベッド部を構成する。ベッドの構築技法はST1・ST5と同様に地山の基底部分の上に版築で拡張するというタイプである。支柱穴についてはSD2に切られていることもあり明確にできない。中央ピットは住居の中央よりやや南寄りと考えられ、四隅が丸くなった不整四角形を呈している。断面は東西方向が舟底型、南北方向は段をなしており、南側半分が低い。ピット埋土は南側部分の底にカーボン含有した層と焼土が重なり、その上を粘質土が覆う。さらにその上にカーボンを認めることができる。これは、最初中央ピットの南半だけを使用していたが、なんらかの理由で北半を拡張し使用した証拠である。

遺物は細片を含め総数1,200点余が出土しているが、図示し得たのは13点と少ない。壺は2点出土している。129の口縁部は外反し、端部は下方に肥厚して口唇部は外傾する面をなす。内外面共ハケ調整。130は装飾された口縁部である。口唇部に波状文を施し条線は4条。131～135の底部はすべて平底である。131は底部外面に木葉の圧痕を残す。135は底部外面を叩いている。



第14図 ST6と出土遺物



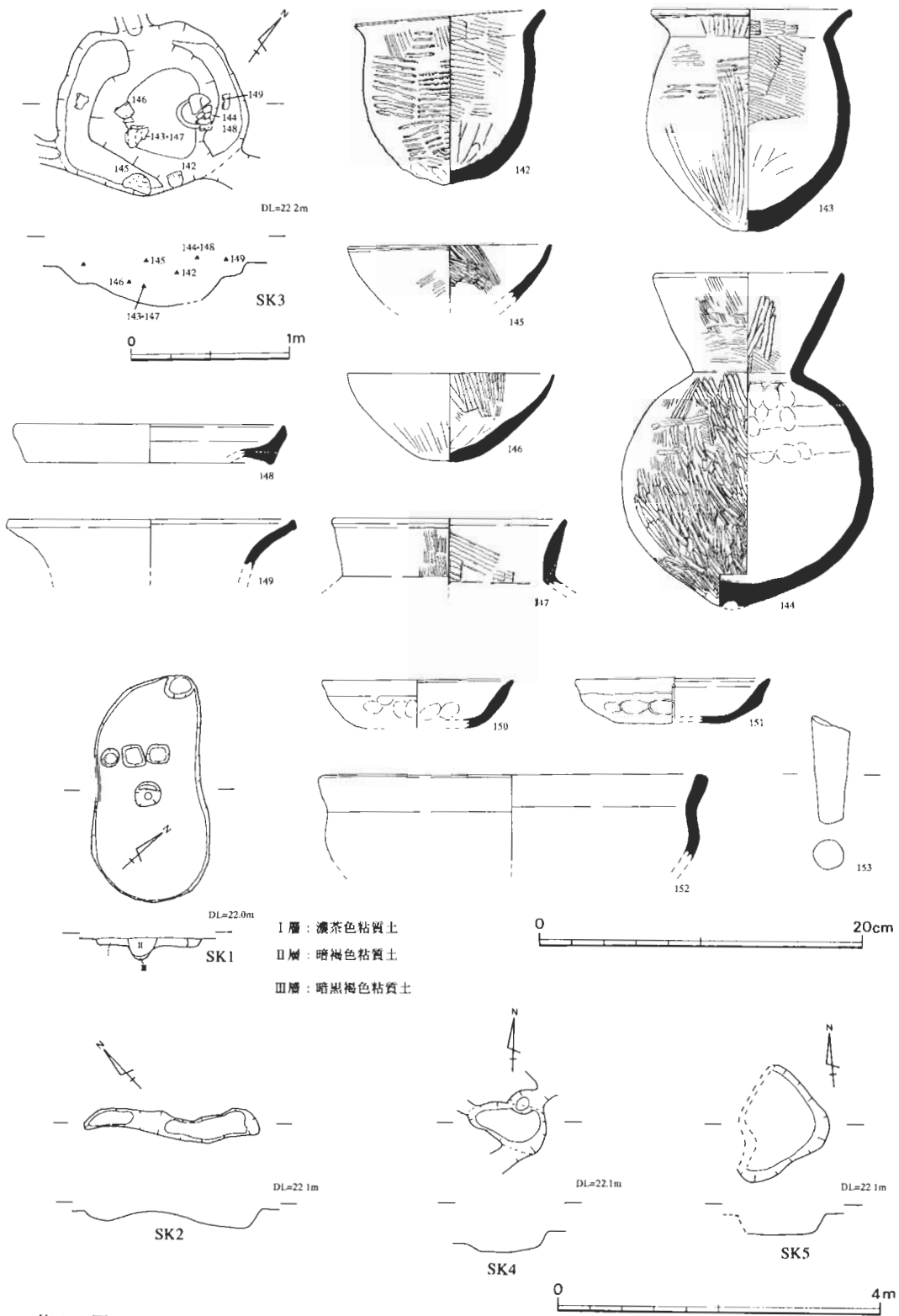
第15図 ST6出土遺物

136～139は鉢で138を除き丸底で、内湾あるいは内湾気味に立ちあがっている。140は高杯の脚部で裾が「ハ」の字状に開く。4孔を穿つと思われる。外面丁寧な縦方向のヘラ磨きを施す。141は「ハ」の字状に張り出す脚部を有すると思われる高杯である。脚部と杯部の接合部周囲に粘土帯を張り付けヘラ状工具で押えている。外面丁寧なナデ調整を施す。ST6は弥生時代後期に属する。

(2) 土坑

SK3 (第16図)

ST4の南東壁内側にあり、ST4を切っている。長軸1.2m、短軸1.0m、深さ35cmの隅丸方形の土坑である。北側と南側の一部を除き2段に掘り込まれており、東壁は急傾斜しているが西壁はゆるやかに立ち上がる。北壁をSD3に切られている。埋土はⅢ層であるが、最下層はST4のⅠ層と内眼の観察では差異を認めない。その上に焼土層、最上層にカーボンが混入した粘質土層が共にレンズ状に堆積している。遺物は壁および床面に貼り付いた形で完形品を含み10数点の土器が出土した。142は小型の甕である。口縁部まで叩き出しており、口縁部外面は叩いた後縦方向のハケ調整。胴部は外面横方向の太い叩き調整、内面右下りおよび横位のハケ調整を施す。丸底で底部外面に大きな黒斑がある。143も甕である。口径と胴部最大径がほぼ同じで、胴部外面は叩いた後ハケで消している。胴部内面上半は右下りのハケ、下半はヘラ削り後ナデている。144は直口壺である。球形の胴部を持ち、底部は充填粘土が剥離しているが尖底になる。胴部外面は縦および右下りのハケ調整と縦および右下りの丁寧なヘラ磨きをしている。体部上半内面に粘土帯の単位(幅1.5～2.0cm)を明瞭に見ることができる。145・146は鉢である。共に内湾して立ち上がり、内面に右下りのハケ調整を有す。外面はナデている。147は甕である。内面右下り、外面縦方向のハケ調整を施す。148は二重口縁の壺であり、水平に近く外反する口縁に粘土をつぎたしている。149は甕の口縁部で内外面共横方向の強いナデ調整を施す。SK3はST4を切っているが、出土土器を見る限りではST4と変わらない。



第16図 SK1 (150~153)、SK2、
SK3 (142~149)、SK4、SK5

2 中世の遺構と遺物

(1) 土坑

SK1 (第16図)

ST4の北にあり、長さ2.9m、最大幅1.0m、深さは10cm内外と浅い。中央部が僅かにくびれた瓢箪形をしている。床面はほぼフラットで壁は垂直に近い。内側に5個の円形または方形のピットがあるが性格は不明である。埋土はI層であり、埋土中より土師質土器片、瓦質土器片、白磁片合わせて約90点の遺物が出土している。図示できたのは4点、150・151は土師質土器の杯である。共に全体ナデ調整を施し指頭圧痕を認める。底部は観察出来ない。152は瓦質の鍋、153は同じく瓦質の鍋の脚である。土坑の性格は不明である。

SK2 (第16図)

ST6の西側に隣接する東西に細長い不整形の土坑である。長軸2.2m、最大幅35cm、深さ20cmあり中央部が最も高く東西に落ち込んでいる。図示できるものはないが、土師質土器片が5点出土した。

SK4 (第16図)

ST5の東側コーナー部に位置する。長軸1.0m、短軸50cm、深さ25cmの卵形の土坑である。北縁に径30cmのピットを伴う。外面に叩き目を有する弥生土器片が27点と土師質土器片が5点出土したが図示できるものはない。性格は不明。

SK5 (第16図)

調査区南西端に位置し、南北方向1.5m、西側は攪乱のため確認できない。深さ28cm、土師質土器片が数点出土した。

(2) 柱穴

P5 (第17図—156)

瓦質の鍋である。内湾しながら立ち上がり、口縁部「く」の字状に外反する。外面指頭圧痕が顕著である。

P6 (第17図—157)

高杯の脚である。内部縦穴が貫通している。外面1/3ほど剝離しているが、丁寧なナデ調整を施す。弥生土器であるが、他に土師質土器片が2点伴って出土したので、中世のピットと判断した。

P7 (第17図—154 (1)・154 (2)・155)

ST5の南東壁内側に位置する。長軸42cm、短軸29cm一方がやや尖った卵形のピットである。東側が段状に掘り込まれており、深さは約20cmである。図示できたのは2点。他に土師質土器片6、瓦質土器片2、弥生土器片1、釘状鉄製品1が出土した。154は青磁碗である。154(1)と154(2)は同一個体であるが互いに接合できる部位にはない。龍泉窯系青磁I類に分類される。内湾気味に立ちあがる胴部から口縁部は僅かに外反する。高台は断面四角で高台部畳付およびその内部は露胎である。外面無文、内面および見込には蓮華文を片彫り施文している。12世紀中葉から13世紀初頭にかけての出土が多いタイプである。155は土師質土器の皿である。平底から外反して立ちあがり、口唇部は丸くおさめる。体部全体横ナデ調整を施す、底部外面は回転糸切り痕を残す。

(3) 溝状遺構

SD2 (第17図—158～163)

調査区全体をほぼ一直線に東西に貫く幅0.9～1.2mの溝で深さ0.5～0.7m、東西で比高差が少ない。ST3・2・6・5の順で東から切っており、西流していたと推測される。埋土はⅢ層からなり下層ほど砂粒が多くなる。細片を含め約1,000点の遺物が出土しているが、約9割は弥生土器片である。158～161は平底の底部である。161は底部外面を叩いている。162は土師質土器の杯である。内湾して立ちあがり、口縁部僅かに外反する。体部内外面共ナデ調整を施す。163は土師質土器の鍋である。頸部に稜を有し、全体ナデ及びハケ調整。

SD3 (第17図—164～169)

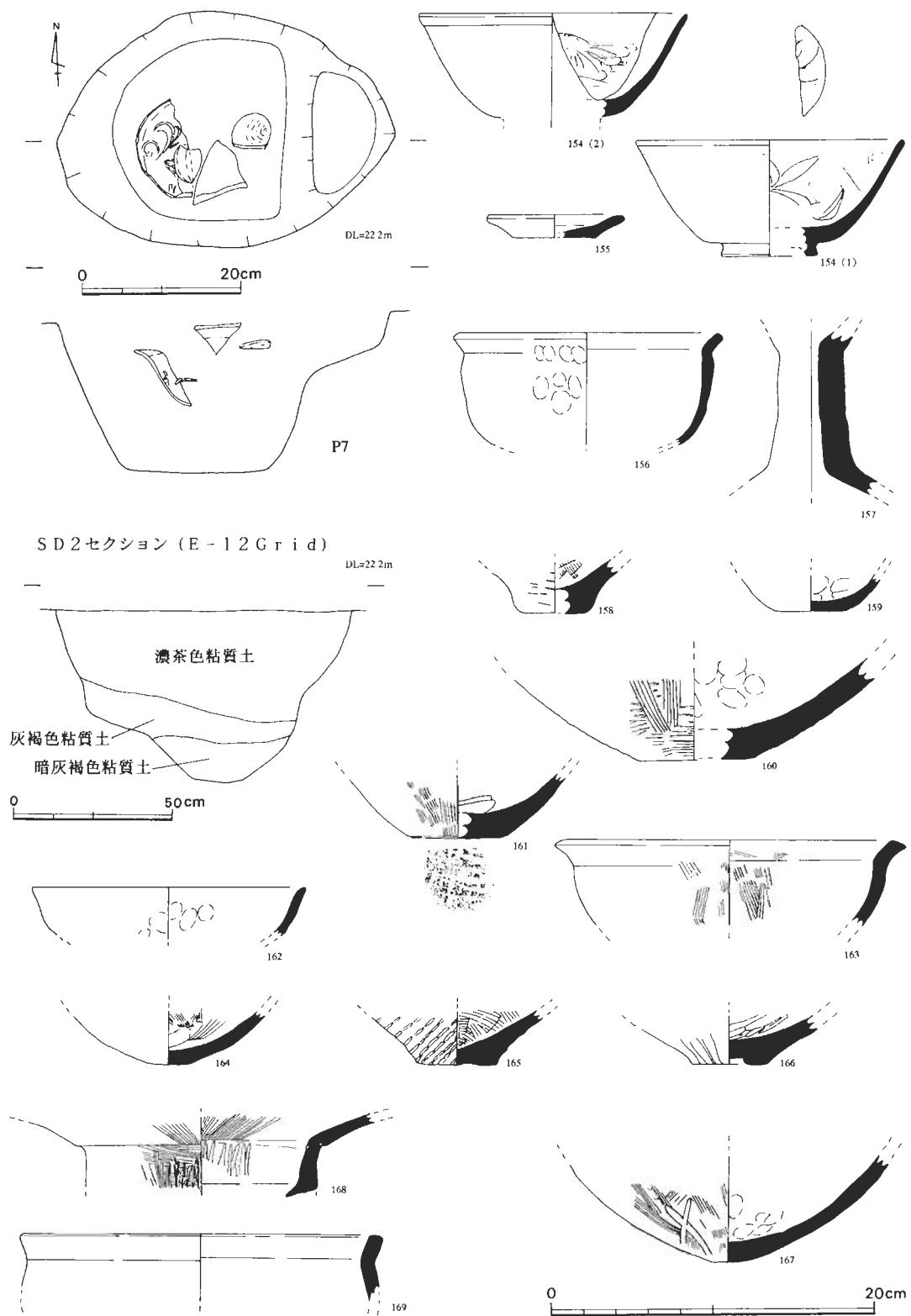
SK3を南端とし、北西方向に伸びる長さ約10m、幅20～40cmの溝で、深さ20cm前後と浅い。弥生土器片を中心として総数約150点の遺物が出土している。164は僅かに突出した平底底部を持つ。165は突出した上げ底状底部から斜上外方に直線的に立ちあがり、胴部外面に左下りの螺旋状叩き目痕を残す。166も上げ底状の底部を持つ。内外面共にヘラ状工具によるナデ調整を施す。167は僅かに残る平底底部を持つ。168は高杯である。内外面共にハケ調整の下地の上にヘラ磨きを施している。169は瓦質土器の鍋である。

3 その他の遺構と遺物

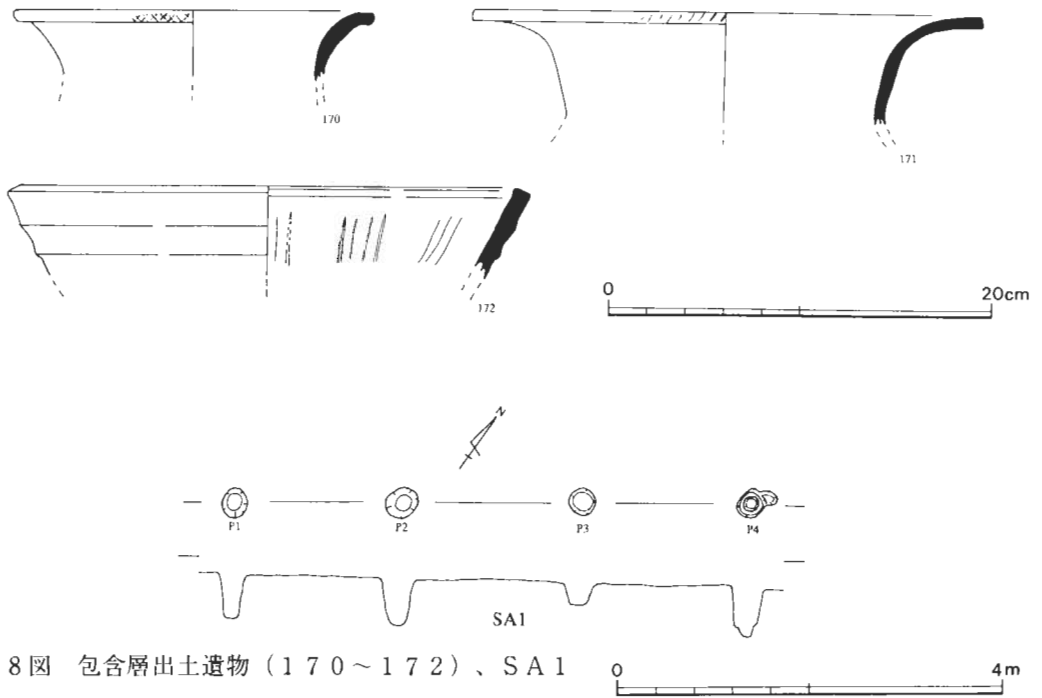
(1) 遺構

SA1 (第18図)

ST4の北西に位置する柵列である。規模は3間(5.46m)でP1よりほぼ北東方向に向かう。柱穴の平面プランはほぼ円形を呈し、径25～30cm、深さ17～50cmで柱間距離は1.78～1.90mで



第17図 P5 (156)、P6 (157)、P7 (154・155)、SD2 (158~163)、SD3 (164~169)



第18図 包含層出土遺物（170～172）、SA1

ある。P4には径約18cmの柱痕跡を認めることができ、また径12cmの小ピットが付属している。出土遺物は少量で図示できるものはなく、所属時期も不明である。

SD1

調査区東側を南北に走る長さ約12m、最大幅50cmの溝。深さ10cm前後と非常に浅く、ST1・ST2を切り、中世の溝SD2に切られている。出土遺物は図示できるものはなく、所属時期も不明である。

(2) 遺物 (第18図-170～172)

遺構検出面から出土した遺物を3点図示した。170は壺の口縁である。口唇部に×印状の飾りを巡らしている。171も壺で口縁部が強く外反し、口唇部に飾りを施している。172は瓦質の摺鉢であり、内面に3～4の条線を持つ。

第V章 まとめ

稗地遺跡からは、今回比較的小規模な調査であったにもかかわらず弥生時代後期後半～古墳時代初頭の竪穴住居6棟（ST1～ST6）を中心とする諸遺構ならびに遺物が出土した。以下に遺構・遺物をまとめてみたい。

1. 遺構

6棟の竪穴住居址は、平面形から2つのタイプに分けることができる。すなわち円形と方形であり、ST1・3・6が円形に、ST2・4・5が方形に属する。円形住居址は床面の外周部を1段高くしたベッド状遺構を有しているところに構造上の第1の特徴を求めることができる。ベッド状遺構をもつ竪穴住居址は北部九州において弥生時代中期に出現し近畿・瀬戸内地方においては少ないが、南四国では弥生時代後期後半（2世紀末ごろ）にいたって登場し、その後古墳時代初頭まで多く認められる。⁽¹²⁾ ベッド状遺構の構築技法としては、一旦床面まで掘り下げた後粘土を版築する方法と、地山部を整形し段を削り出す方法がある。南四国では両者が認められるが、地山整形の技法を採るものが多い。当遺跡の円形住居址ではST3が削り出し法、ST1・6が版築法によっている。ベッドの形態はST3・6が壁面に沿って巡っているのに対し、ST1は六角形に巡り、住居址の平面プランとは異なっており他の類例と比較しても特殊な形態と言えよう。これら3棟の円形住居址の床面中央部には炉跡と考えられる中央ピットが付属しているが、ST1・6は中心より南側に寄っている。高知平野の場合、弥生時代後期後半までは中央ピットが床面中央部に位置しているが、時期が新しくなるにつれて南側に片寄る傾向が認められる。⁽¹³⁾ 本例も同様な傾向を有している。また中央ピットの平面形が円形から楕円形に変化するのも当該期の一般的な特徴である。これらの竪穴住居を支える支柱穴は、ST1においてはベッド部コーナーに6個認められるが、ST3・6については、SD2に切られていることもあって明確にすることができない。

方形住居址は円形住居址に比べて全体的に小規模である。特にST2においてその傾向が著しい。ST4・5は方形のベッド部を有している。ST4のベッド部は北隅で段部が不明瞭となっており、構築技法は東側版築、西側は地山成形である。この技法は松ノ木遺跡ST1に類例が見られる。⁽¹⁴⁾ またST5の東北壁沿いとST4の各壁沿いには壁溝が巡っている。

ベッド状遺構については、祭場説・寝床説など諸説があるが、当遺跡や南四国における一般的な傾向としては、ベッド構造を有する住居跡が集落内において特別な位置を占めていたと考えられるような状況証拠は認められない。出土遺物もベッドを持つ住居址から祭祀行為を示唆するようなものは認められない。当遺跡においても時期を接する6棟中の5棟までにベッド状遺構が存在するという事実は、この種の竪穴住居を弥生時代末から古墳時代初頭にかけての一般的な形態として理解するべきであろう。

第 4 表 南四国におけるベッド状遺構を伴う住居址 (※は推定)

遺跡名	形態	面積 (㎡)	ベッド部形態	ベッド幅 (m)	底面から の高さ (cm)	構築技法	所属時期	出土遺物 他	
ひびのき	A1	方形	※33	コの地状又は全周	0.4~1.6	20	地山成形	古墳初期	ヒビノキ Ⅲ
	B1	円形	63.6	※全周	0.8~1.0	15	〃	弥生後期	ヒビノキⅠ・Ⅱ
	B2	隅丸方形	※36	2面は確認	0.8~1.2	35	〃	〃	ヒビノキ Ⅱ
	D1	〃	※42	〃	0.7	30	〃	〃	〃
林田	ST2	不整円形	63.5	三日月状に2面	最大0.8	10	〃	〃	〃・鈿・鉄鏃
田村遺跡群	Loc34A ST14	楕円	※58	三日月状に1面	最大1.4	40	〃	〃	勾玉、鉄鏃
	Loc36B ST1	円形	24.6	〃	最大0.5	15	〃	〃	
	Loc45 ST1	〃	31	全周	0.3~0.9	10	〃	〃	
	田中地区ST5	〃	36.3	※全周	0.3~0.6	5~20	〃	〃	
ひびのきサウジ	ST1	隅丸方形	※13.8	コの字状又は全周	0.81~0.98	4~6	〃	〃	
	ST3	〃	29.27	全周	0.66~1.1	2~12	〃	〃	中央Pが南寄
	ST8	隅丸長方形	17.02	2面	1.25~1.35	11~17	〃	〃	阿波系搬入甕
	ST5	※隅丸長方形	29.9	2面	0.95~1.52	6~10	〃	古墳初期	中央Pが南寄、小型丸底
西分増井	ST2	※隅丸方形	※36	コの字状	1.0~1.4	10	版築	〃	畿内系搬入甕
	ST5	隅丸方形	※29.16	コの字状又は全周	0.9~1.2	15	〃	〃	〃
	ST7	円形	50.2	全周	0.6~1.0	5	地山成形	〃	
	ST10	不整隅丸方形	23.04	コの字状	1.0~2.0	5~10	版築	〃	中央Pが南寄
松ノ木	ST1	隅丸方形	25	全周	1.0~1.2	10~15	地山成形+版築	弥生後期	中央Pが南寄
	ST3	〃	47.45	〃	1.1~1.9	10~17	版築	〃	
金地	ST1	隅丸方形	28.09	〃	0.55~1.08	17	地山成形	〃	
	T2	円形	22.9	コの字状又は全周	1.06	24	〃	〃	
稗地	ST1	円形	33.2	全周	0.3~1.1	5~15	版築	〃	ベッド部は六角形
	ST3	〃	※50	コの字状	1.0~1.8	30~40	地山成形	〃	
	ST4	方形	25	〃	0.8前後	5~8	地山成形+版築	〃	古墳時代に入る可能性あり
	ST5	〃	20.3	全周	0.9~1.0	20	版築	弥生後期 -古墳初期	
	ST6	円形	56.7	〃	1.0~1.2	15	〃	弥生後期	

2.遺物

比較的まとまった遺物を出土したST3出土遺物を中心にまとめてみる。ST3出土弥生土器の割合は甕：壺：鉢：高杯：その他=10：6：4：3：1であり、甕が多数を占める。甕は在地系の甕の中に、明らかに在地甕とは異なる搬入土器が1点含まれる。在地甕は例外なく口縁部が「く」の字状に外反し、胴部は多く長胴砲弾型が推定される。胴部外面は叩きあるいは叩いた後ハケで消しており、内面のヘラ削りは全く認められない。底部は平底も残るが、突出した小さな平底から丸底を指向している。これに対して搬入土器は口縁部のみの出土ではあるが、土器製作技法が在地の土器には認められないものである。すなわち、口縁端部を上方へ摘み上げ、内面に横方向のハケ調整を施している。胎土良く引き締まり、在地土器か大粒の砂粒を含むのに対して、角閃石及び雲母片を含んで濃褐色に発色している。河内地域からの搬入品である。

壺は広口壺で占められており、口縁部に装飾を施す例（40～42）が見られる。鉢は小型で半球形の椀状を呈するものと浅い皿状のものが大部分を占める。

先学により、南四国の弥生時代後期土器は7期に編年されているが、⁽¹⁵⁾ ST3は後期7期に当てはめることができよう。

土器以外に注目できる遺物として、鉄器が出土している。ST3からは6本の鉄鍔茎部、またST5からは穂摘具と鉄鍔・鉄鍔茎部が出土している。鉄鍔は南四国においては弥生時代中期に出現し、⁽¹⁶⁾ 後期に至り各集落間に普及して行く。鉄製穂摘具は北部九州地域からの出土例が知られているが、⁽¹⁷⁾ 該当期の定形品としては県下はじめての出土であり、ST3から打製の石庖丁4点が出土していることと考え合わせ興味深い。

註

- (1) 香我美町教育委員会 『香我美町史 上巻』 S60
- (2) 岡本健児 『日本の古代遺跡・39 高知』 保育社 H1
- (3) 高橋啓明・出原恵三 『下分遠崎遺跡Ⅰ』 香我美町教育委員会 1989
- (4) 宅間一之・山本哲也・森田尚宏 『林田遺跡』 土佐山田町教育委員会 1985
- (5) 岡本健児・廣田典夫 『ひびのき遺跡』 ♪ S52
- (6) 高知県教育委員会 『田村遺跡群』 第4・5分冊 1986
- (7) 高橋啓明 『ひびのきサウジ遺跡』 土佐山田町教育委員会 1990
- (8) 出原恵三 『西分増井遺跡群』 春野町教育委員会 1990
- (9) ♪ 『松ノ木遺跡Ⅱ』 本山町教育委員会 1992
- (10) 吉原達生 『金地遺跡』 南国市教育委員会 1992
- (11) 出原恵三 『田村遺跡群－田中地区－』 高知県教育委員会 1986
- (12) 福岡県教育委員会 『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 XIX』 1977
- (13) (7) に同じ
- (14) (9) に同じ
- (15) 出原恵三 「土佐の弥生後期土器編年」 『瀬戸内の弥生後期土器の編年と地域性』
古代学協会四国支部第4回大会発表資料 1990
- (16) 高知県香美郡野市町所在の野市本村遺跡から1992年に出土している。
- (17) 寺沢知子 「道具と技術Ⅰ－鉄製穂摘具－」 『弥生文化の研究5』 雄山閣 1989

遺物観察表

(第1表)

挿入番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	粘土・色調	特徴	備考
4-1	ST1	竈	13.4 (2.5) — —	0.5～2mmの砂粒を含む にぶい黄褐色	口縁部はラップ状に強く外反する。口唇部は外傾する面をなし上に構み上げる。内外面共ナデ調整。	
4-2	4	4	15.0 (4.9) — —	0.5～3mmの砂粒を含む 褐色	口縁部ラップ状に外反して端部は上下に肥厚する。口唇部は面をなし凹む。口唇部及び口縁端部はナデ調整頭部外面は右下りのハケ調整、内面は横方向のハケ調整。	
4-3	4	4	21.4 (2.3) — —	0.5～3mmの砂粒を含む 褐色	口縁部ラップ状に外反して端部は上に肥厚する。口唇部は面をなし僅かに凹む。口唇部及び口縁端部は横ナデ。外面縦ハケ、内面横ハケ調整。	
4-4	4	4	21.9 (2.7) — —	0.5～1mmの砂粒を含むが少ない 外面にぶい褐色 内面浅黄褐色	口唇部ラップ状に強く外反する。口唇部は僅かに上下に拡張され面をなし、ナデ調整の後貝殻敷線による浅い押引文を巡らす。外面ナデ、内面は丁寧なハケ調整を施す。	
4-5	4	4	25.0 (2.2) — —	0.5～2mmの砂粒を含むが少ない 内外面浅黄褐色 断面褐色 焼成良好	口縁部ラップ状に強く外反する。口唇部上下に拡張し貝殻敷線による文様を巡らす。外面は右下りのハケ調整、内面横ハケ一部ヘラ寄せ。	
4-6	4	4	24.0 (2.1) — —	0.5～2mmの砂粒を多く含む 褐色	口縁部直線上に外方に開く。口唇部は外傾する面をなし上下に拡張し液状文を施す。条線は3条、内外面ハケ調整。	1/4剥離している
4-7	4	鉢	12.0 6.0 — 1.8	0.5～5mmの砂粒を含む にぶい褐色	丸底から内湾して立ち上がり、口唇部は僅かに内傾して面をなす。外面入念なナデ調整、内面右下りのハケ調整。指頭圧痕を認める。	黒斑有
4-8	4	4	13.5 7.2 — —	0.5～4mmの砂粒を含む 浅黄褐色	丸底から内湾して立ち上がり、口縁部はやや内傾する。口唇部は面をなす。外面ナデ、内面ハケ調整。指頭圧痕を認める。	
4-9	4	4	19.0 9.8 — 4.6	0.5～3mmの砂粒を多く含む にぶい黄褐色	平底から内湾して立ち上がり口縁端部は僅かに肥厚して口唇部は外傾し面をなす。外面ナデ調整、端部にハケ目痕を残す。内面上半右下りのハケ調整、下半ナデ調整。底部に指頭圧痕。	
4-10	4	4	18.4 (7.2) — —	1～3mmの砂粒を含むが少ない 黄灰色	内湾気味に立ち上がり口唇部は丸くおさめる。外面横方向の太い叩き調整。内面ハケ調整。	
4-11	4	4	17.4 (3.5) — —	0.5～3mmの砂粒を含む 灰白色	口縁部内湾し口唇部はほぼ水平の面を持つ。外面ハケ調整。内面右下りのハケ調整。	
4-12	4	4	22.2 (3.5) — —	0.5～3mmの砂粒を多く含む チャートを含む 褐色	口縁部僅かに肥厚し口唇部は外傾して面をなす。外面ナデ、内面右下りのハケ調整。	黒斑有
4-13	4	甕	— — — —	0.5～2mmの砂粒を多く含む チャートを含む 外面灰褐色 内面にぶい褐色	口縁部外反し端部僅かに外方に肥厚して口唇部は面をなす。外面右下りの丁寧なハケ調整、内面ハケ調整後ナデ。指頭圧痕を認める。	外面擦ける
5-14	4	底部	— (2.0) — —	0.5～2mmの砂粒を含む 外面灰白色 内面浅黄褐色	突出した平底から外反して立ちあがる。底部内面に指頭圧痕を有す。	1/2黒斑
4-15	4	4	— (1.7) — 4.4	0.5～3mmの砂粒を含む多い にぶい褐色	突出した平底から上外方に立ちあがる。外面叩き目有。内面指頭圧痕を認める。	
4-16	4	4	— (2.4) — 3.4	0.5～3mmの砂粒を含む 灰白色	突出した平底から斜上外方に立ちあがる。内外面共指頭によるナデ調整。	
4-17	4	4	— (2.3) — —	0.5～2mmの砂粒を多く含む 外面にぶい褐色 内面褐色	僅かに残る平底から内湾して立ちあがる。外面叩き調整。内面指頭圧痕を残す。	
4-18	4	4	— (4.5) — 2.6	0.5～3mmの砂粒を多く含む 灰白色	上縁底状底部から内湾して立ちあがる。内外面共ナデ調整。底部内面は凹み底部は貼り付けている。	口縁に黒斑有
4-19	4	4	— (5.6) — 3.4	0.5～2mmの砂粒を含むが少ない にぶい褐色	平底状底部から上外方に内湾気味に立ちあがる。外面縦及び右下りの叩き調整。内面指頭によるナデ。	黒斑有

遺物観察表

(第2表)

種目番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	胎土・色調	特徴	備考
5-20	ST1	底器	- 8.0	外面灰褐色 内面にぶい橙色	底部から内湾気味に立ちあがる。内面叩き後縦ハケ。内面縦方向のナデ調整。	
〳-21	〳	〳	- (6.9)	0.5~3mmの砂粒を多く含む チャートを含む 橙色	丸底から内湾気味に立ちあがる。外面ハケ目痕が残る。内面右下りのハケ調整、底部ヘラ状工具によるナデ調整。	剝離・磨耗共に多い
〳-22	〳	〳	- (4.7)	0.5~3mmの砂粒を含む 橙色	丸底と思われる。内外面ナデ調整。	
〳-23	〳	〳	- (4.6)	0.5~2mmの砂粒を含む 橙色	丸底風底部をもつ。外面ナデ調整、内面ハケ調整後ナデ調整。	
〳-24	〳	〳	- (3.0)	0.5~2mmの砂粒を含む チャートを含む 外面黄灰色 内面淡黄色	平底をもつ。外面縦ハケ後一部ナデ調整。内面指頭圧痕有。	一部煤ける
〳-25	〳	〳	- (3.9)	0.5~10mmの砂粒を含む チャートを含む にぶい橙色	平底をもつ。外面縦ハケ、内面指頭によるナデ調整。	
〳-26	〳	〳	- (4.1)	0.5~2mmの砂粒を含む 角礫及びチャートを含む 外面にぶい黄橙色 内面灰白色	平底から立ちあがる。外面細い縦ハケ、内面ナデ調整。指頭圧痕を認める。	黒斑有
〳-27	〳	〳	- 5.6	0.5~3mmの砂粒を含む チャートを含む 外面橙色 内面明褐色	平底から内湾気味に立ちあがる。内面指頭によるナデ調整。	磨耗激しい
6-28	ST2	壺	- (3.4)	外面浅黄橙色 内面灰白色	平底底部から内湾気味に立ちあがる。内外面共ナデ調整、内面一部ヘラ磨き。	磨耗激しい
〳-29	〳	〳	- (2.3)	砂粒を含むが少ない 外面灰白色 内面ににぶい黄橙色 焼成良好	高台風底部をもち底部は貼り付けている。内外面共ナデ調整。	一部煤ける
〳-30	〳	壺	11.8 (4.7)	砂粒を含むが少ない にぶい橙色	口縁部内面に稜をなして「く」の字状に外反し口唇部は丸くおさめる。口縁部外面ナデ、内面ハケ調整。胴部外面横方向の叩き調整、内面ナデ調整。	外面煤ける
〳-31	〳	〳	- (8.7)	0.5~3mmの砂粒を含む チャートを含む 橙色	丸底か尖底。外面ナデ、内面横及び右下りのハケ調整。胴部中央付近に指頭圧痕が顕著。	
〳-32	〳	〳	- (5.5)	0.5~3mmの砂粒を含む チャートを含む 灰黄色	平底から内湾気味に立ちあがる。内外面共ナデ調整。	
〳-33	〳	鉢	10.0 (6.5)	細砂粒を含むが少ない 外面にぶい橙色 内面灰褐色	口縁部内湾し口唇部は丸くおさめる。全体ナデ調整を施す。	
〳-34	〳	〳	18.0 (2.7)	0.5~3mmの砂粒を多く含む にぶい黄橙色	口縁部僅かに内湾し口唇部は内傾して面をなす。外面ナデ調整、内面ハケ調整後縦方向のヘラ磨き。	
〳-35	〳	〳	23.8 (3.5)	0.5~1mmの砂粒を含む 外面浅黄橙色 内面淡赤橙色	口縁部僅かに肥厚し口唇部は外傾して面をなす。主調整は全体ナデ調整か。	磨耗激しい
7-37	ST3	壺	19.6 (2.2)	0.5~2mmの砂粒を含む 角閃石・雲母片を含む 濃褐色	口縁部ラッパ状に外反し端部は上方へ積み上げる。外面横ナデ・内面横ハケ調整。	釜入品
〳-38	〳	壺	21.2 (4.5)	0.5~5mmの砂粒を含む チャートを含む 外面浅黄橙色 内面灰白色	口縁部ラッパ状に外反し端部は上下に僅かに肥厚する。外面右下りのハケ調整、上端部は横ハケ後横ナデ。内面右下りハケ調整、上端部は横ナデ。	
〳-39	〳	〳	24.0 (3.1)	砂粒を含むが少ない 外面浅黄橙色 内面橙色	口縁部ラッパ状に外反し端部は下に拡張し口唇部は面をなす。外面右下りのハケ調整、内面ナデ調整。	
〳-40	〳	〳	20.0 (1.2)	0.5~3mmの砂粒を含む にぶい橙色	水平に近く外反する口縁部を持つと思われる。口唇部外傾する拡張された面をなし波状文を施す。条線は3条。全体ナデ調整。	
〳-41	〳	〳	20.0 (2.2)	にぶい橙色	口縁部漏斗状に外反すると思われる。口縁部は上下に凹み口唇部は外傾する面をなし、中央で交差する浅い鋸歯文を配す。外面右下りのハケ調整、内面横ナデ。	

遺物観察表

(第4表)

挿入番号	遺構番号	器種	口径 器高 法量 胴径 (cm) 底径	胎土・色調	特徴	備考
8-62	ST3	底部	— (2.1) — 4.9	0.5～3mmの砂粒を含む チャートを含む 淡黄色	突出した平底から上外方に立ちあがる。外面ハケ調整痕を残す。内面ハケ及びナデ調整。	
8-63	8	8	— (2.8) — 2.4	0.5～3mmの砂粒を多く含む 外面浅黄褐色 内面灰色	突出した平底から内湾気味に立ちあがる。内外面共ナデ調整。	黒斑有
8-64	8	8	— (2.5) — 1.0	0.5～3mmの砂粒を含む チャートを含む 灰白色	尖底風底部から内湾気味に立ちあがる。外面ナデ調整。内面右下りのハケ調整。底部は内面に指頭圧痕を残す。	
8-65	8	手掘り器	— (2.0) —	0.5～2mmの砂粒を含む チャートを含む 灰白色	外面ハケ調整痕を残す。内面指頭圧痕が顕著である。	黒斑有
8-66	8	底部	— (4.7) — 2.6	0.5～3mmの砂粒を多く含む チャートを含む 褐色	平底から内湾気味に立ちあがる。内外面共観察不能。	磨耗激しい
8-67	8	8	— (5.0) — 3.0	0.5～2mmの砂粒を含む 褐色	平底から内湾気味に立ちあがる。外面縦及び右下りのハケ調整。内面ナデ調整。	
8-68	8	8	— (3.9) — 3.0	0.5～3mmの砂粒を多く含む 外面灰白色 内面灰色	平底から内湾気味に立ちあがる。外面縦ハケ調整。内面指頭圧痕が顕著である。	
8-69	8	8	— (5.4) —	0.5～3mmの砂粒を多く含む チャートを含む 外面にぶい黄褐色 内面暗オリーブ灰色	丸底から内湾気味に立ちあがる。外面ハケ調整痕を残す。内面指頭によるナデ調整。	
8-70	8	8	— (6.2) —	0.5～2mmの砂粒を含む チャートを含む 外面にぶい黄褐色 内面灰色	丸底から内湾気味に立ちあがる。外面叩き調整一部後でナデしている。内面ナデ調整。	黒斑有
8-71	8	8	— (4.0) — 3.2	0.5～2mmの砂粒を含む 外面灰白色 内面灰色	平底から内湾気味に立ちあがる。外面縦ハケ調整、底部叩いている。内面指頭圧痕が顕著。	
8-72	8	鉢	7.4 6.3 — —	0.5～3mmの砂粒を多く含む チャートを含む 外面褐色 内面灰白色	丸底から内湾して立ち上がり、口径部は丸くおさめる。外面は縦及び右下りのハケ調整。内面ナデ調整。	
8-73	8	8	10.0 6.7 — —	0.5～2mmの砂粒を含む チャートを含む 外面にぶい黄褐色 内面褐色	僅かに残る平底から上外方に直線的に立ちあがる。外面叩いた後ナデ消している。内面右下りの螺旋状ハケ調整。底部ナデしている。	
8-74	8	8	10.2 6.1 — —	0.5～2mmの砂粒を含む チャートを含む 浅黄色	僅かに突出した底部から内湾して立ちあがる。口径部は内傾して面をなす。外面上半は右下りのナデ、下半は左下りの叩き調整。内面は右下りのハケ調整。底部はナデ調整。	黒斑有
8-75	8	8	20.0 (5.0) —	0.5～1mmの砂粒を含む 淡黄色	口径部は内湾気味に立ちあがり端部は僅かに肥厚して口径部は外傾した面をなす。外面横方向の叩き調整。内面右下りのハケ調整を施す。	
8-76	8	8	15.0 9.4 —	0.5～3mmの砂粒を多く含む 浅黄褐色	丸底から内湾して立ちあがり口径部は丸くおさめる。外面不定方向の荒いナデ調整。内面は上半が右下りのハケ調整、下半はナデ調整を施す。	
8-77	8	8	14.0 (3.5) —	0.5～3mmの砂粒を含む チャートを含む 褐色	内湾気味に立ちあがり口径部は丸くおさめる。外面ナデ調整、内面は右下りのハケ調整。	
8-78	8	8	12.4 6.2 —	0.5～2mmの砂粒を含む にぶい黄褐色	丸蓋から内湾して立ち上がり、口径部は内傾して僅かに面をなす。外面上半はナデ調整、下半は叩き調整。内面は右下りのハケ調整を施す。	
8-79	8	8	12.0 6.2 —	0.5～3mmの砂粒を多く含む チャートを含む 浅黄褐色	丸蓋から内湾して立ちあがり、口径部は丸くおさめる。外面上半は右下りのハケ調整、下半はナデ調整。内面上半は右下りのハケ調整、下半はナデ調整。	
8-80	8	8	23.0 (6.5) —	0.5～2mmの砂粒を含む 灰白色	口径部内湾し端部は僅かに肥厚する。口径部は面をなし凹む。外面叩き調整後一部ナデしている。内面ハケ調整後ナデ調整を施す。	
8-81	8	8	23.5 (6.5) —	0.5～2mmの砂粒を含む にぶい褐色	口径部内湾し口径部は外傾する面をなす。外面左下りの叩き調整。内面右下りのハケ調整後縦方向の細いヘラ磨きを施す。	

遺物観察表

(第5表)

採回番号	遺構番号	器種	口径 器高 口径 底径 (cm)	胎土・色調	特徴	備考
9-82	ST3	高杯	— (5.8) — —	細砂粒を含む 外面灰白色 内面浅黄褐色	立ち上がり部外面は稜をなし口縁部は外反する。口縁部外面は丁寧なナデ調整。立ち上がり部以下は横ナデ。内面は不定方向のナデ調整。立ち上がり部に粘土接合帯を認める。	
9-83	9	9	— (7.5) — —	細砂粒を含む 浅黄褐色	杯部は内湾して立ち上がり半球形状を呈する。杯部内外面は丁寧なヘラ磨きを施す。脚部外面は縦ハケ後ヘラ磨き、内面は横ハケ調整。頸部外周に短い左下りのヘラ状原体による調整痕有。	
9-84	9	9	— (2.2) — 17.8	細砂粒を含む 明褐色 焼成良好 雲母片を微量含む	大きく裾が広がり4孔を穿つと思われる。外面ナデ調整後、細いヘラ状工具で横方向に暗文風の調整を施す。内面ハケ調整後一部ナデ調整。	搬入品の可能性有
9-85	9	9	— (6.8) — —	1~4mmの砂粒を多く含む チャートを含む 淡黄色	円柱状で脚部部は「ハ」の字状に外反する。杯との接合部に指頭圧痕が残る。内面はナデ調整。	磨耗激しい
10-100	ST4	壺	17.6 (4.4) — —	外面にぶい黄褐色 内面黄灰色	口縁部はラッパ状に外反して端部は上へ積み上げる。口唇部は面をなし左下りの凹線を周囲に巡らす。	磨耗激しい
9-101	9	9	— (2.0) — —	0.5~2mmの砂粒を多く含む 外面にぶい黄褐色 内面灰白色	丸底からゆるく上外方に立ちあがる。外面叩き調整痕を残す。	
9-102	9	壺	11.8 (3.6) — —	0.5~2mmの砂粒を多く含む 褐色	口縁部「く」の字状に強く外反し口唇部は丸くおさめる。外面横ナデ、内面ナデ調整を施す。	
9-103	9	9	10.4 (7.3) — —	0.5~2mmの砂粒を含む 外面浅黄褐色 内面灰白色	胴部内湾して立ち上がり口縁部は「く」の字状にゆるく屈曲して外反する。口唇部は外傾した面をなす。外面荒いナデ、下端に叩き調整痕が残る。口縁部内面は右下りのハケ調整、胴部内面ナデ。	
9-104	9	9	13.4 (9.6) — —	0.5~1mmの砂粒を含む 外面にぶい褐色 内面褐灰色	口縁部「く」の字状に外反し口唇部は丸くおさめる。外面叩き調整の後ナデ消している。内面上半ナデ調整。下半ヘラ状原体によるナデ調整。	磨耗している
9-105	9	9	18.6 (14.8) 23.0 — —	0.5~2mmの砂粒を多く含む にぶい黄褐色	口縁部内面に稜をなして「く」の字状に外反し口唇部は丸くおさめる。最大径を中位より上に有す。口縁部外面横ナデ、胴部外面左下りの太い叩き調整で一部後に縦ハケを施す。口縁部内面横ナデ、胴部内面上半は右下りのハケ、下半は縦方向の荒いハケ調整で一部指ナデ。胴部上半に粘土接合帯が顕著である。	外面が一部ぼける
9-106	9	底部	— (8.7) — —	0.5~3mmの砂粒を多く含む 外面にぶい黄褐色 内面褐灰色	僅かに突出した丸底から内湾して立ち上がる。外面不定方向の叩き調整後一部ナデ調整。内面荒いナデ調整。指頭圧痕を残す。	黒斑有
9-107	9	9	— (4.0) — 4.2	0.5~3mmの砂粒を含む 外面にぶい褐色 内面灰色	押し潰したような平底から斜上外方に立ちあがる。外面横方向の叩き調整。内面横ハケ、下端には指頭圧痕が顕著である。	黒斑有
9-108	9	9	— (2.8) — 5.2	0.5~2mmの砂粒を含む にぶい黄褐色	下端が左右に肥厚した高台風底部から上外方に立ちあがる。外面ハケ、内面ナデ調整、指頭圧痕を残す。	黒斑有
9-109	9	9	— (3.5) — 2.4	0.5~3mmの砂粒を多く含む チャートを含む 外面灰白色 内面灰色	平底から斜上外方に立ちあがる。外面横方向の叩き調整後縦ハケで消している。内面横ハケ後一部ナデ調整を施す。底部を叩いている。	
11-110	9	壺	13.0 (5.0) — —	0.5~1mmの砂粒を含む 褐色	球形の胴部から口縁部ゆるく外反して内面に稜を持つ。口唇部を上へ強く積み上げる。口縁部外面強い横ナデ、頸部横方向のヘラ磨き、胴部は右下りのヘラ磨きを施す。内面は全体強い横ナデ。	
9-111	9	鉢	8.0 (4.0) — —	0.5~3mmの砂粒を多く含む 外面黄褐色 内面浅黄褐色	胴部内湾し口縁部は上方へ立ちあがる。口唇部は上へ積み上げ稜をなす。内外面共ナデ調整。	
9-112	9	9	17.2 10.1 — 2.4	0.5~5mmの砂粒を含む チャートを含む 外面褐色 内面にぶい黄褐色	僅かに残る平底から内湾して立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。内外面共ナデ調整。	
9-113	9	9	34.8 (4.4) — —	0.5~2mmの砂粒を含む 褐色	大型の鉢。口縁部部はやや立ち気味で口唇部は丸くおさめる。外面強い横ナデ後右下りのヘラ磨き。内面横ナデ調整を施す。	黒斑有
12-117	ST5	9	12.2 (2.8) — —	細砂粒を含む 淡黄色	口縁部一部外反した後垂直意味に立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。口唇部横んで強い横ナデ。内外面共指頭圧痕を認める。	
9-118	9	9	12.8 (3.0) — —	細砂粒を含む 浅黄褐色	体部一旦外方へ開いた後口縁部上方に立ちあがり、端部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。口縁部横んで強い横ナデを施す。内外面共に指頭圧痕が顕著である。	

遺物観察表

(第6表)

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	胎土・色調	特徴	備考
12-119	ST5	甕	17.6 (2.6) —	細砂粒を含む 濃褐色 — 角閃石・雲母片を含む	口縁部「く」の字状に外反し端部を上につまむ。 口唇部は丸くおさめている。頸部内面に鋭い稜をなす。全体丁寧なナデ調整。	一部煤ける 贗人品
〃-120	〃	壺	21.4 (3.8) —	0.5~2mmの砂粒を含む チャートを含む — にぶい橙褐色	口縁部ラッパ状に外反し口唇部は外傾して面をなす。口唇部横ナデ。外面やや右下りのハケ調整、内面ナデ調整。	
〃-121	〃	〃	— (12.0) 20.0 —	0.5~3mmの砂粒を含む チャートを含む — 外面にぶい橙褐色 内面灰色	丸底風底部から内湾して立ちあがり球形の配部を持つ。外面縦ハケ後へラ磨きを施す。内面上端はナデ調整。下半は横及び右下りのハケ調整を施す。	黒斑有
〃-122	〃	甕	— (13.2) 16.0 2.6	0.5~3mmの砂粒を含む チャートを含む — にぶい黄褐色	平底から内湾して立ちあがる。外面縦ハケ調整。内面上半は縦ハケ、下半は右から左への横ハケを施す。	
〃-123	〃	〃	— (5.2) — 3.2	0.5~2mmの砂粒を含む 灰白色	平底から内湾気味に立ちあがる。外面横方向の叩き調整後縦ハケ、内面縦方向のナデ調整を施す。	黒斑有
13-124	〃	手握土器	4.2 5.6 — 4.3	外面灰白色 内面オリブ黒色	平底の杯型手握土器で口縁の一部が凹む。内外面共に指頭圧痕を認めるが特に外面に顕著である。胴部下端を指頭で絞っている。	
〃-125	〃	高杯	— (5.1) — 11.4	0.5~3mmの砂粒を多く含む チャートを含む — 浅黄褐色	胴部「ハ」の字状に開き4孔を外から内に向かって穿つ。端部は丸くおさめる。外面横方向の叩き調整後荒いナデ調整。一部に整形後粘土を貼付けている。内面ナデ調整。	剥離激しい
14-129	ST6	壺	26.0 (3.9) —	0.5~3mmの砂粒を多く含む チャートを含む — にぶい橙褐色	口縁部ラッパ状に外反し端部は拡張して口唇部は外傾する面をなす。口縁端部は横ナデ。外面右下りのハケ調整、内面横ハケ調整。	
〃-130	〃	〃	34.6 (3.1) —	0.5~2mmの砂粒を多く含む チャートを含む — 橙褐色	口縁部水平近く外反する。口唇部は外傾する幅広い面をなし波状文を施す。条線は4条。外面ナデ調整。内面ナデ調整、一部へラ磨き。	黒斑有
〃-131	〃	底部	— (3.4) — 4.4	0.5~3mmの砂粒を多く含む チャートを含む — 橙褐色	一方に歪み突出した平底から内湾して立ちあがる。外面ナデ調整、内面ハケ調整。底部外面に木葉の圧痕を残す。	
〃-132	〃	〃	— (3.6) — 6.2	0.5~3mmの砂粒を多く含む 外面橙褐色 — 内面灰白色	広い平底から斜上外方に立ちあがる。外面ナデ調整、内面横ハケ調整。	黒斑有
〃-133	〃	〃	— (2.5) — 4.0	0.5~2mmの砂粒を含む チャートを含む — 浅黄褐色	平底から斜上外方に立ちあがる。外面ナデ。内面ハケ調整、一部後でナデている。	
〃-134	〃	〃	— (1.9) — 4.0	0.5~2mmの砂粒を含む — — 浅黄褐色	平底から内湾気味に立ちあがる。外面ナデ、内面ハケ調整。	
〃-135	〃	〃	— (5.4) — 5.0	0.5~3mmの砂粒を多く含む チャートを含む — 外面灰白色 内面灰色	平底から内湾気味に上外方に立ちあがる。外面叩き調整後ナデ消している。底部も叩いている。内面右下りのナデ調整を施す。	
15-136	〃	鉢	12.0 (3.9) —	0.5~2mmの砂粒を多く含む チャートを含む — 橙褐色	丸底から内湾して立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。全体ナデ調整。	磨耗している
〃-137	〃	〃	16.8 6.6 —	0.5~3mmの砂粒を多く含む チャートを含む — 浅黄褐色	丸底から内湾気味に立ちあがり口唇部は外傾した面をなす。外面右下りのハケ調整。内面上半はハケ調整、下半は指頭によるナデ調整。	
〃-138	〃	〃	25.0 (7.0) —	細砂粒を含むが少ない 浅黄褐色	内湾気味に立ちあがり口唇部は僅かに面をなす。外面ナデ調整、下半にハケ調整痕を残す。内面一部ハケ調整残るが全体ナデ調整。	
〃-139	〃	〃	12.8 (5.6) —	細砂粒を含むが少ない 浅黄褐色	丸底から内湾気味に立ちあがり口唇部は丸くおさめる。全体ナデ調整を施す。	
〃-140	〃	高杯	— (6.0) — 15.2	0.5~2mmの砂粒を含む にぶい黄褐色	裾が「ハ」の字状に開き端部は内傾する面をなす。4孔を穿つと思われる。外面横方向の丁寧なへラ磨き、内面横ナデを施す。	
〃-141	〃	〃	— (3.8) —	0.5~3mmの砂粒を含む チャートを含む — 淡黄色	「ハ」の字状に張り出す脚部を有すると思われる。杯部と脚部の接合部に粘土帯を張り付けへラ状工具で押さえている。内外面共ナデ調整。	
16-142	SK3	甕	11.7 10.5 —	0.5~3mmの砂粒を含む にぶい橙褐色	丸底から胴が張らずに頸部に至る。屈曲部内面は丸いところと稜をなすところがある。口縁部まで叩き出し外面叩き後口縁部のみ縦ハケ。内面右下り及び横位のハケ、底部強い指ナデ。	黒斑有

遺物観察表

(第7表)

挿図番号	遺構番号	器 種	口径 法量 器高 胴径 底径	胎土・色調	特 徴	備 考
16-143	SK 3	壺	12.2 13.8 12.7 2.2	0.5~4mmの砂粒を多く含む 外面浅黄橙色 内面ふい橙色	口縁部「く」の字状に外反し内面に丸味のある輪をもつ。口唇部は比較的丁寧に面取る。口径と胴部最大径がほぼ同じ。胴部外面叩きナデハケ、下半は叩きがすべてハケで消されている。内面上半は右下りのハケ、下半はヘラ削り+ナデ。	
〃-144	〃	壺	11.6 29.0 15.8 -	0.5~3mmの砂粒を多く含む チャートを含む 外面ふい橙色 内面橙色	剥離しているが平底から立ちあがり球形の胴部をもつ。胴部はわずかに内湾気味に立ちあがり口唇部外面は丸味を帯び内面は角張る。口角部外面は右下りのハケ調整後右下り及び横位のヘラ磨き、胴部は縦及び右下りのハケ調整後縦及び右下りの丁寧なヘラ磨き。口頸部内面は右下りのハケ調整後縦のヘラ磨き。端部付近内外面は最終段階で横ナデ。体部内面上半に粘土帯の単位(幅1.5~2.0cm)を明確に見ることが出来る。下半はナデの地下に下から上へのヘラ削りのあった可能性大。	
〃-145	〃	鉢	12.6 (3.6) -	0.5~3mmの砂粒を含む チャートを含む 淡黄褐色	内湾して立ちあがり端部はほとんど未調整。外面ナデ調整でヒビ割れ状の亀裂が入る。内面右下りの強いハケ調整。	
〃-146	〃	〃	13.0 5.5 -	0.5~3mmの砂粒を多く含む チャートを含む 淡褐色	丸底から内湾して立ちあがり、中位から上が急に薄くなる。外面縦ハケの上をナデている。内面上半は右下りのハケ。下半はナデ調整。	
〃-147	〃	壺	14.4 (4.2) -	0.5~3mmの砂粒を多く含む チャートを含む 褐色	口唇部を揃んで横にナデている。外面縦ハケ、内面右下りのハケ調整を施す。	
〃-148	〃	壺	16.8 (2.4) -	0.5~3mmの砂粒を含む チャートを含む 褐色	口縁部は斜上外方に立ちあがる。口縁部に粘土をつき足している。	
〃-149	〃	壺	17.6 (3.0) -	0.5~3mmの砂粒を多く含む チャートを含む 浅黄褐色	口縁部外反し端部は上に積み上げて面取りしている。内外面共強い横ナデ。下端部が縦口縁で剥離している。	
〃-150	SK 1	土師質土器杯	11.8 4.0 -	細砂粒を含む 浅黄褐色	底部から斜上外方に立ちあがり口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。内外面共ナデ調整、端部は横ナデ。指頭圧痕を認める。	
〃-151	〃	〃	12.2 2.8 -	細砂粒を含む 浅黄褐色	口縁部僅かに段をもって外反し口唇部は丸くおさめる。内外面共ナデ調整、端部は揃んで強い横ナデを施す。外面に指頭圧痕が顕著である。	
〃-152	〃	瓦質鍋	20.6 (5.4) -	細砂粒を含む 灰白色	内湾する胴部から口縁部はゆるく外反する。口唇部は僅かに外傾して面をなす。全体横ナデ調整。	
〃-153	〃	瓦質鍋・脚	-(6.5) -	細砂粒を多く含む 暗灰色	胴面わずかに横円を早す。	全体煤ける
17-154 (1) (2)	P 7	青磁碗	16.6 7.2 6.0	釉の発色は暗青緑色	底部の器肉は厚く口縁部僅かに外反し端部は丸味をもっておさめる。高台は断面四角で高台部骨付及びその内部は露胎である。外面無文、内面及び見込みに蓮華文を施す。	
〃-155	〃	土師質土器皿	8.6 1.4 5.2	細砂粒を含む 褐色	底部から外反して立ちあがり口唇部は丸くおさめる。内外面共横ナデ調整を施す。底部外面は回転糸切り。	
〃-156	P 5	瓦質鍋	16.2 (7.0) -	細砂粒を多く含む 淡黄色	内湾しながら立ちあがり口縁部「く」の字状に外反する。口唇部は外傾する面をなし頸部内面は丸味をもつ。内外共ナデ調整。外面指頭圧痕が顕著である。	
〃-157	P 6	高杯	-(10.3) -	0.5~2mmの砂粒を多く含む 褐色	裾が「ハ」の字状に広がる脚部。外面丁寧なナデ調整。内部縦穴が貫通している。	1/3剥離している
〃-158	SD 2	底部	-(3.3) 4.2 -	0.5~1mmの砂粒を含む ふい黄褐色	突出した平底から斜上外方に立ちあがる。外面横位の叩き調整、内面ハケ調整。	黒斑有
〃-159	〃	〃	-(2.3) 4.2 -	細砂粒を含む 褐色	平底から内湾気味に立ちあがる。外面右下りのハケ目痕を残す。内面ナデ調整。	黒斑有
〃-160	〃	〃	-(6.3) 7.0 -	0.5~2mmの砂粒を多く含む 外面浅黄褐色 内面灰白色	平底から内湾気味に斜上外方に立ちあがる。外面横方向の強い叩き調整後一部縦ハケ。内面荒いナデ、指頭圧痕が顕著である。	
〃-161	〃	〃	-(4.1) 6.2 -	0.5~2mmの砂粒を含む チャートを含む 灰色	平底をもつ。外面縦ハケ調整。底部を叩いている。内面ナデ調整。	黒斑有

遺物観察表

(第8表)

挿図番号	遺構番号	器種	口径 法量 (cm)	器高 胴径 底径	胎土・色調	特徴	備考
17-162	SD2	土師質 上器 杯	15.8 (3.0)	—	0.5~1mmの砂粒を含む にぶい橙色	内湾して立ちあがり口縁部僅かに外反する。口 唇部は丸くおさめる。内外面共ナデ調整。	
〃-163	〃	〃 鍋	20.4 (5.4)	—	0.5~2mmの砂粒を含む にぶい黄橙色	口縁部ゆるく外反し口唇部は外傾した幅広い面 をなす。外面右下りのハケ調整、端部横ナデ。 口縁部内面ハケ調整。端部はナデ。胴部内面は 右下りのハケ調整を施す。	
〃-164	SD3	底部	— (3.4)	— 3.2	0.5~3mmの砂粒を含む 浅黄橙色	僅かに突出した平底をもつ。外面ナデ、内面ヘ ラナデー部ハケ調整。	
〃-165	〃	〃	— (3.5)	— 5.2	0.5~2mmの砂粒を多く含む にぶい橙色	突出した上げ底風底部。外面左下りの螺旋状叩 き調整。内面ハケ調整を施す。	
〃-166	〃	〃	— (3.1)	— 4.7	0.5~3mmの砂粒を多く含む 外面浅黄色 内面オリーブ黒色	上げ底風平底をもつ。内外面共ヘラ状工具によ るナデ調整。	
〃-167	〃	〃	— (6.7)	—	0.5~2mmの砂粒を多く含む 外面淡黄色 内面灰色	僅かに残る平底から内湾して立ちあがる。内面 不定方向のハケ調整、一部ナデ調整。内面ナデ 調整。	
〃-168	〃	高杯	— (5.2)	—	0.5~1mmの砂粒を含むが 少ない にぶい橙色 焼成良好	口縁部大きく外反する。口縁端部は欠損してい る。内外面共ハケ調整の下地の上にヘラ磨きを 施す。方向は外面上半右下り、頸部は横位、下 半は縦。内面は縦方向。	搬入品の可能性有
〃-169	〃	瓦質 鍋	11.2 (4.2)	—	細砂粒を含む 灰色	口縁部ゆるやかに外反し口唇部は幅広い面をな す。全体ナデ調整。	
18-170	包含層	壺	19.0 (3.7)	—	0.5~2mmの砂粒を多く含む 浅黄橙色	口縁部ラッパ状に外反し口唇部僅かに内傾する 面をなす。口唇部を飾っている。	磨耗激しい
〃-171	〃	〃	26.8 (5.8)	—	0.5~2mmの砂粒を多く含む 橙色	口縁部ラッパ状に強く外反し口唇部は外傾した 面をなす。口唇部を飾っている。	磨耗激しい
〃-172	〃	瓦質 摺鉢	26.0 (4.8)	—	細砂粒を含む 灰色	口縁端部横ハケ調整。条線は3~4条。	

写 真 图 版

写真 1



発掘調査区全景



発掘調査風景 (ST4)

写真2



ST1完掘状態（東から）



ST1ベット部セクション（東から）

写真3



ST2検出状態（東から）



ST3検出状態（東から）

写真4

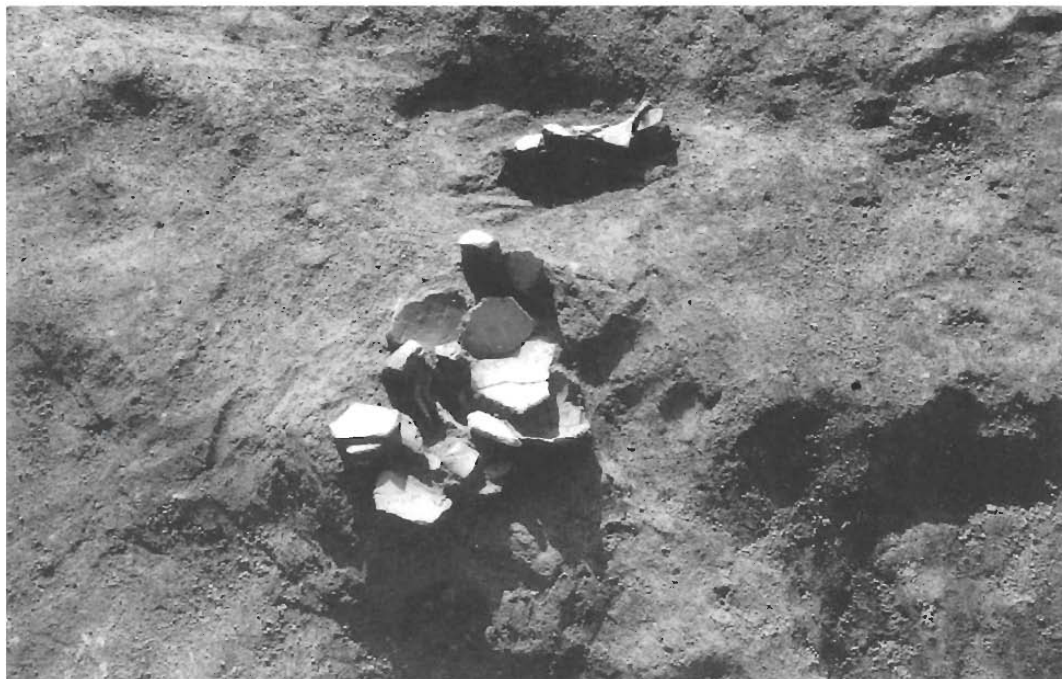


ST3完掘状態（東から）



ST3内SD2セクション（東から）

写真 5



ST3遺物出土状態

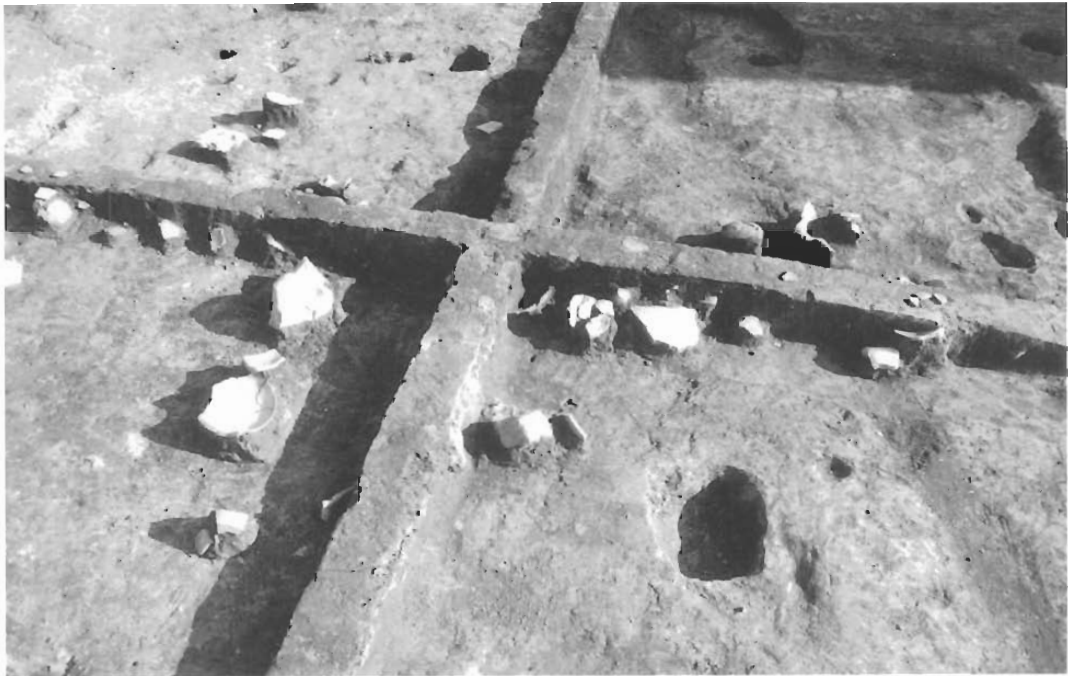


ST3遺物出土状態

写真 6

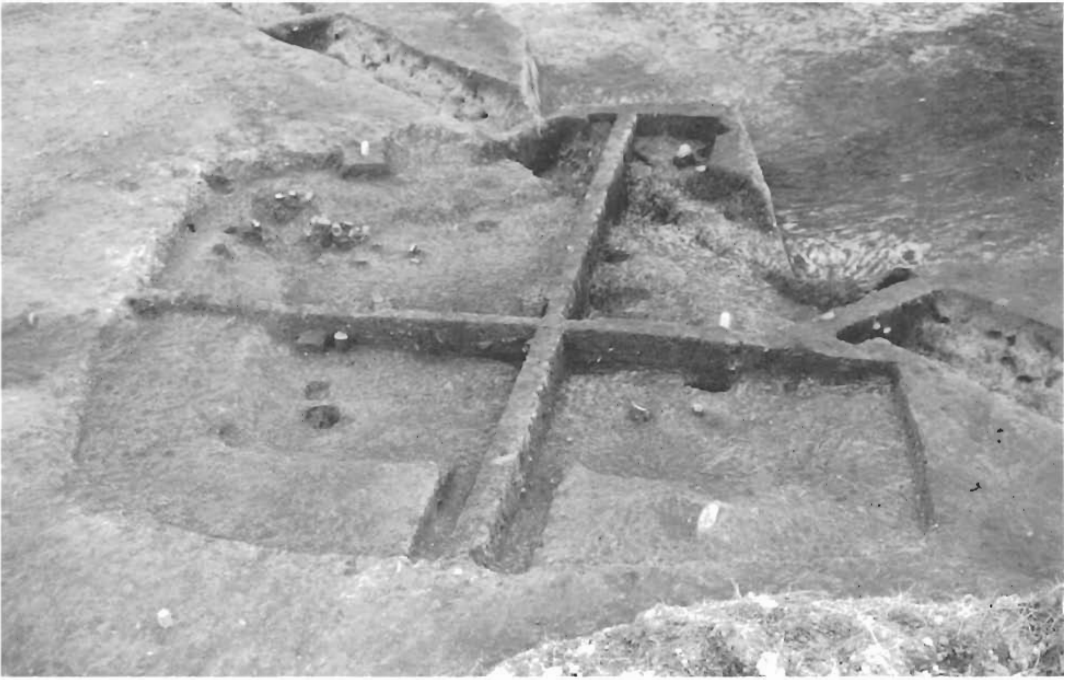


ST4完掘状態（南から）

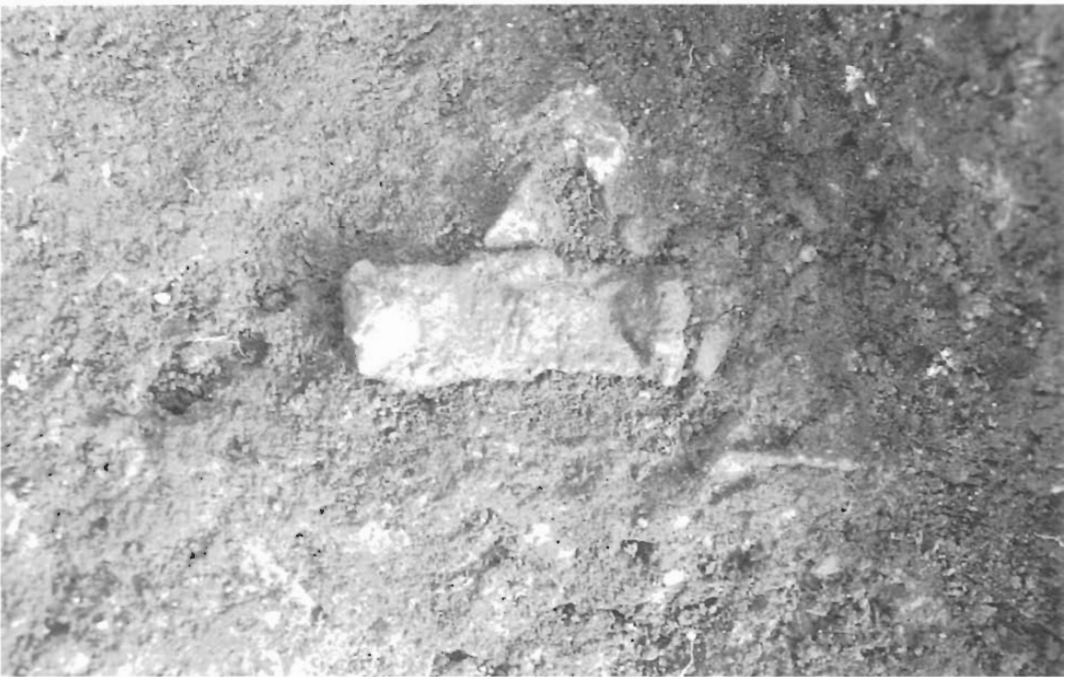


ST4遺物出土状態

写真7



ST5完掘状態



ST5遺物出土状態

写真 8



ST 5遺物出土状態



ST 5遺物出土状態

写真9



ST6完掘状態（西から）

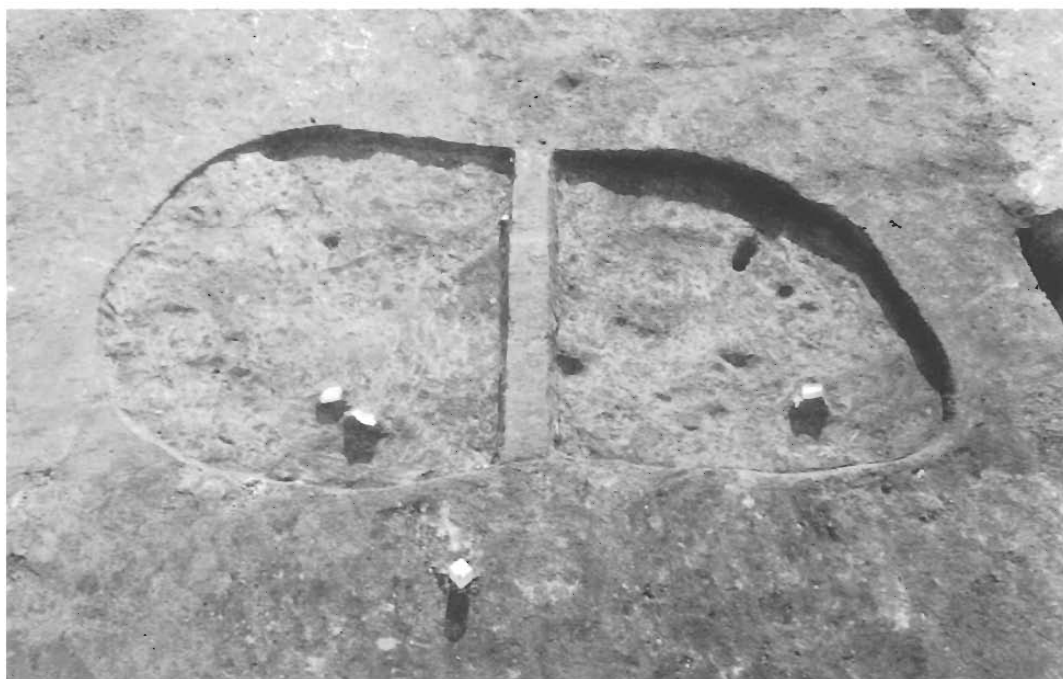


ST6北壁セクション

写真10

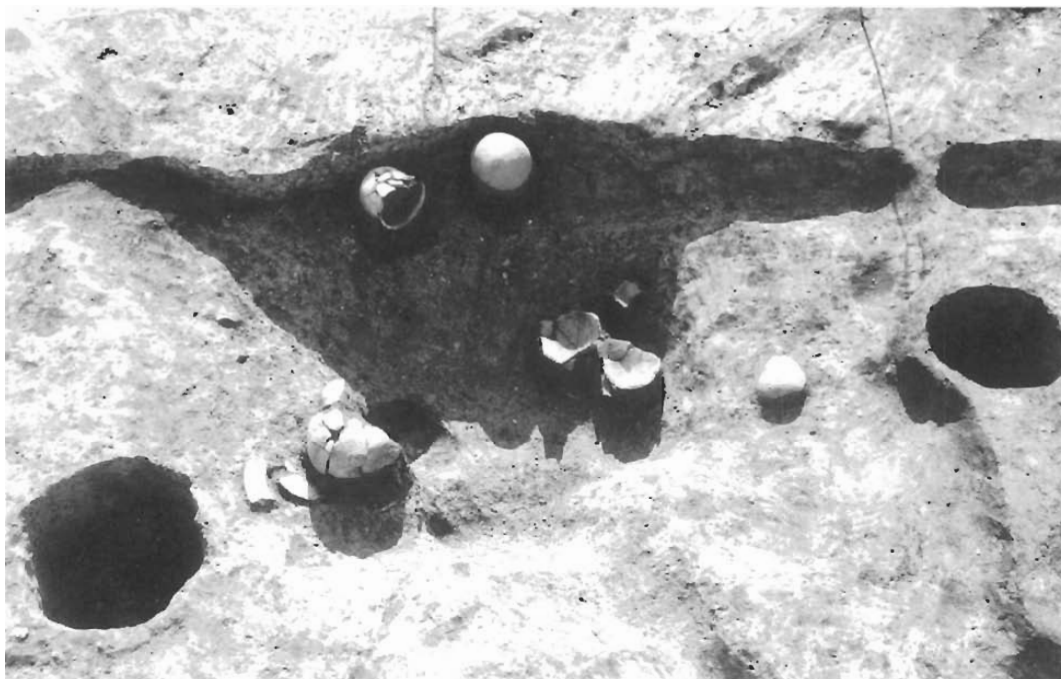


SD2東壁セクション (D7区)



SK1完掘状態 (北から)

写真11



SK3遺物出土状態（北から）

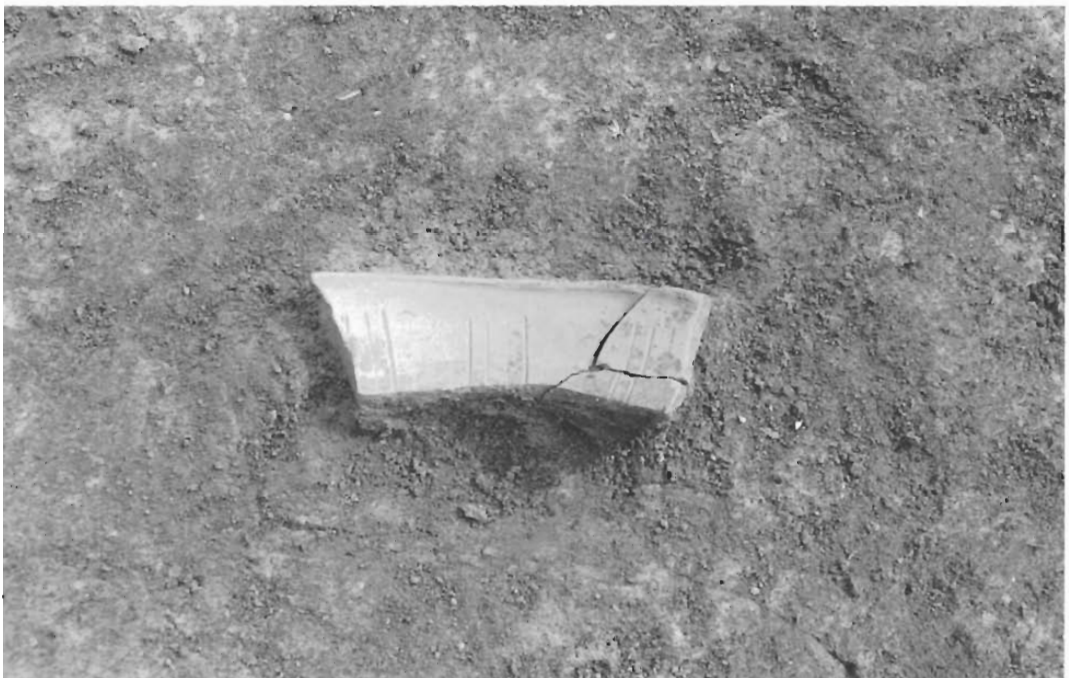


P5遺物出土状態

写真12



P7遺物出土状態

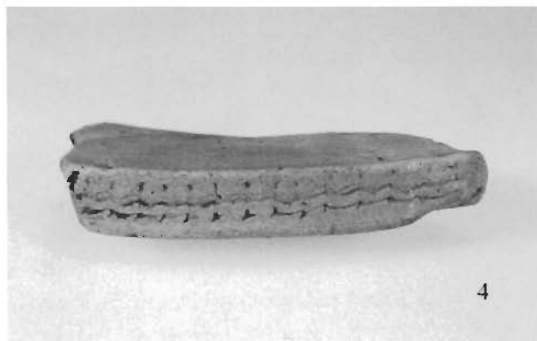


包含層遺物（172）出土状態

写真13



2



4



5



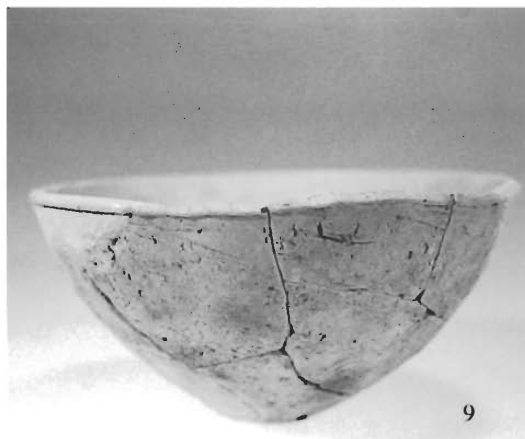
7



6



8



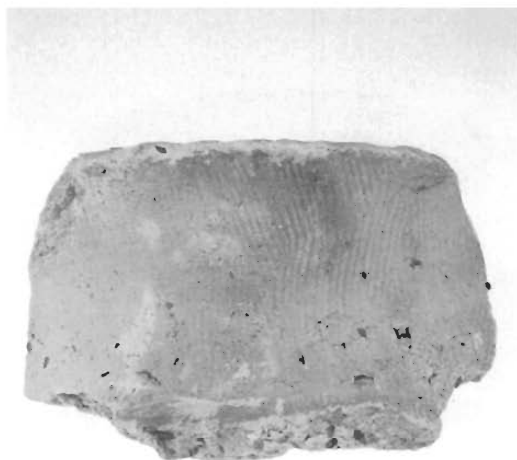
9

ST1出土遺物

写真14



40



44



41



57



56



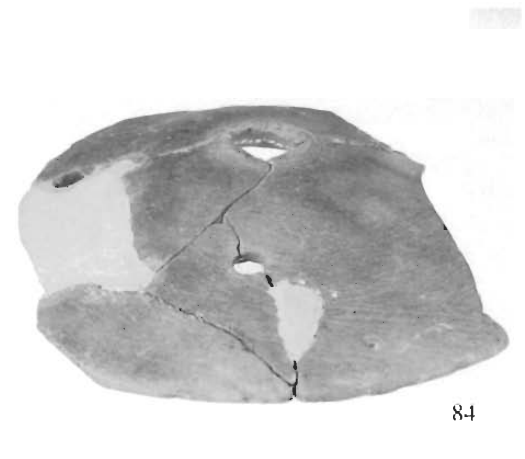
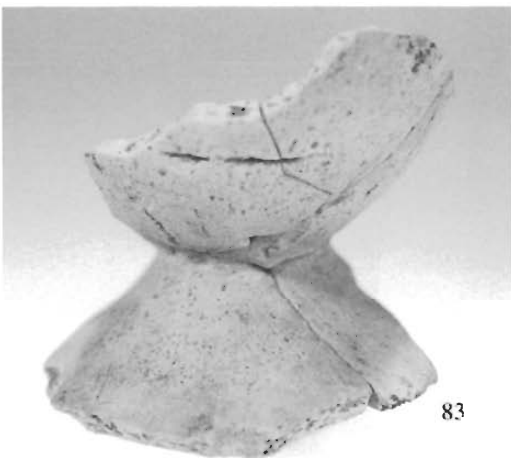
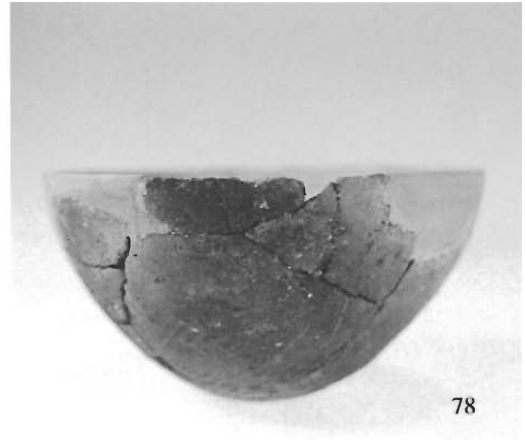
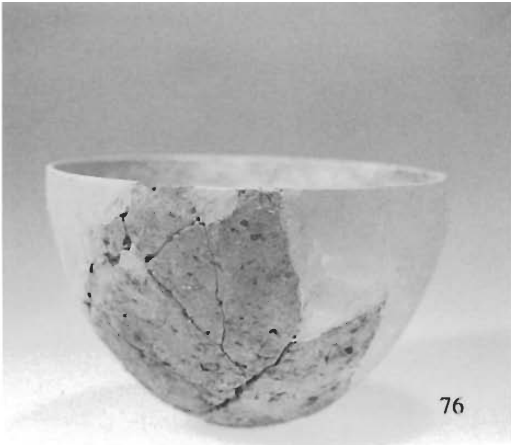
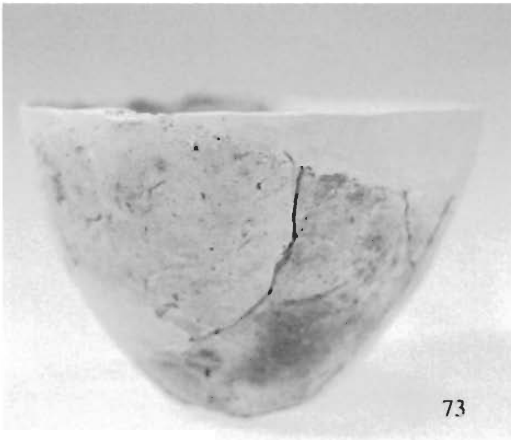
61



72

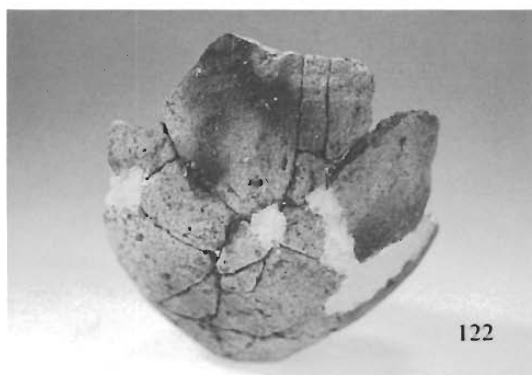
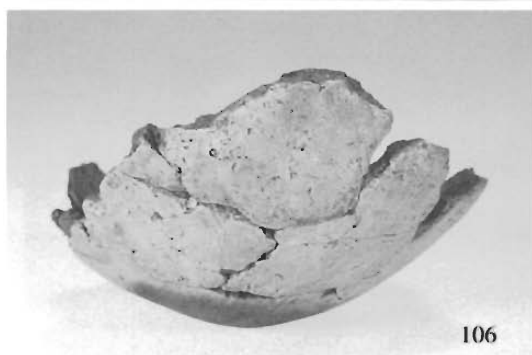
ST 3出土遺物

写真15



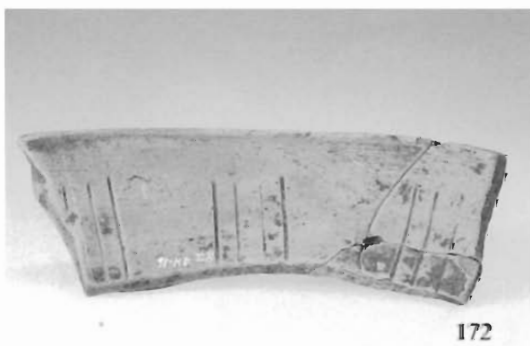
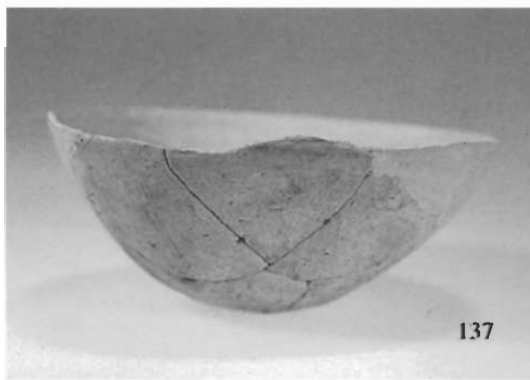
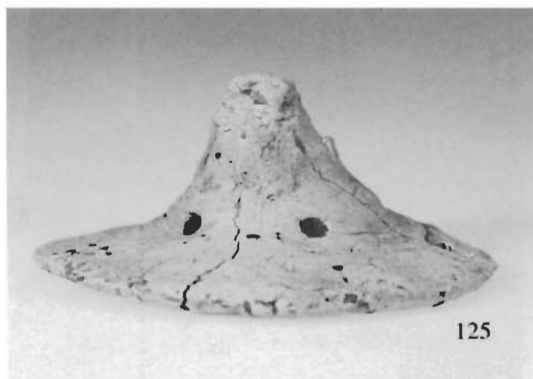
ST3出土遺物

写真16



ST4・5出土遺物

写真17



ST 5・6、SK 1、SD 3、包含層出土遺物

写真18



SK 3出土遺物

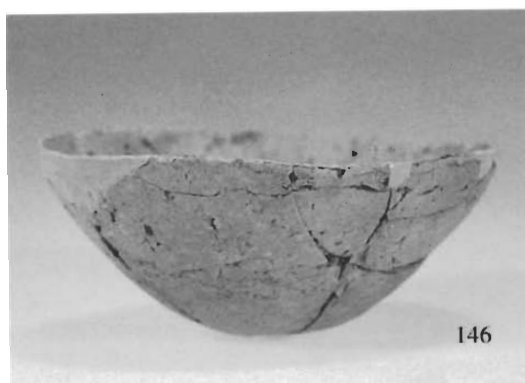


写真19



154

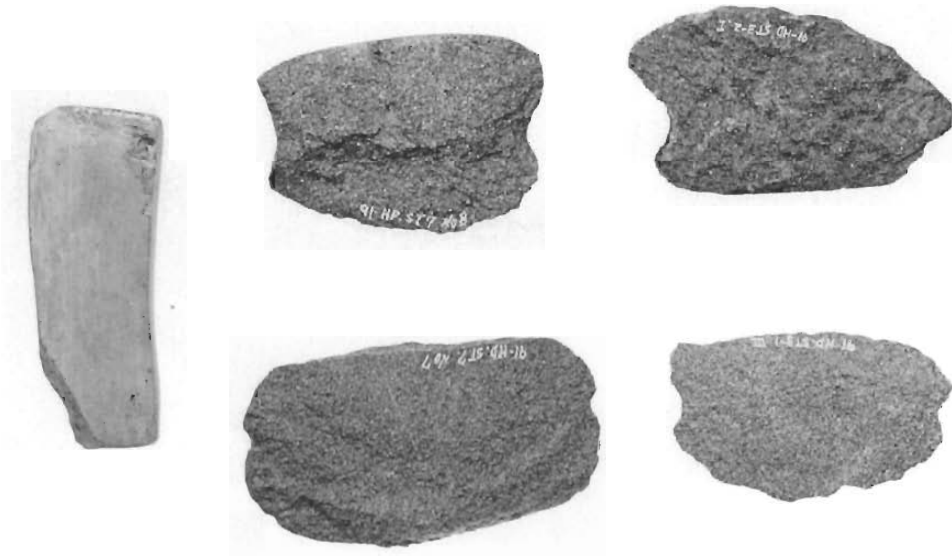
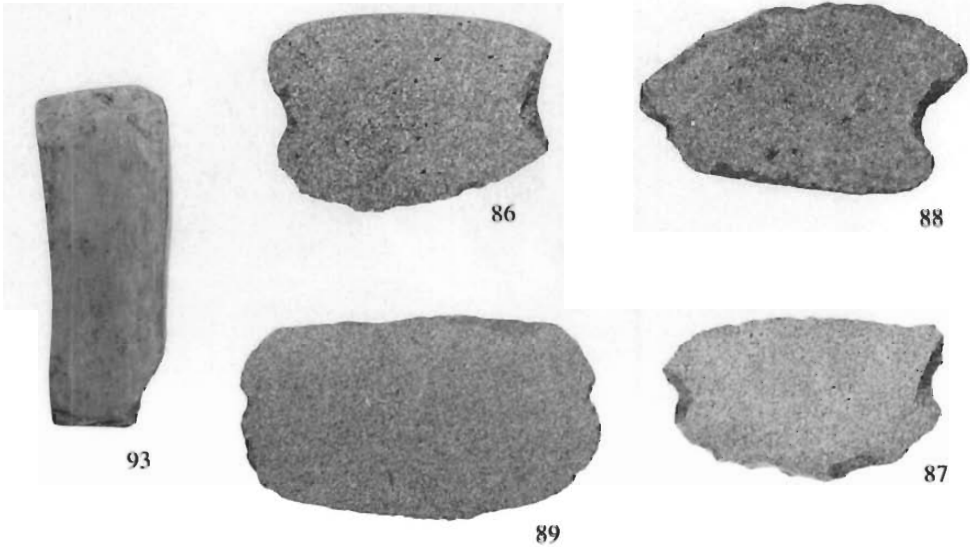


P7出土遺物



155

写真20



ST3出土石器 (石包丁・砥石)

写真21



128



-1301



126



97



98



127

ST3・5出土鉄器（鉄製穂摘具・鉄鋸）

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第11集

稗 地 遺 跡

—— 高知県香美郡香我美町 ——

1993.3

発 行 財団法人 高知県文化財団
埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

印 刷 共 和 印 刷 株 式 会 社